

# 針葉樹会報

第 137 号  
2016 年 12 月



## 目 次

【思い出の私の一葉】	離内裏	高橋 尚好
三四郎会・御岳山宿坊に集う	佐藤久尚、高崎俊平、中村雅俊平	本間浩
雪の天狗岳	原博貞、池知昭洋、中間高嶺	高崎
「聖・赤石行」報告	本間	本間
「聖・赤石行」前後記	中村	中村雅明
幌尻岳・神威岳行	宮武	宮武俊平
神威岳山麓に大塚武先輩の遭難碑訪問	小島	小島幸久
シニア会員の岳沢行	竹中	竹中雅明
岳沢行	本間	和人
ミヤマキリシマの九重連山	中村	浩彰
● 会務報告	雅明	雅明
針葉樹総会議事録	和人	幸久
総会挨拶	浩彰	浩彰
針葉樹会会长を退任して	竹中	尚好
会長就任のご挨拶	小島	高橋
中村保さんが「アジア黄金のピッケル賞」を受賞	和人	高橋尚好
● 現役山岳部から	彰	高橋尚好
安全登山普及指導者	内海	高橋尚好
中央研修会への参加報告	拓人	高橋尚好
八ヶ岳縦走山行	大矢和樹	高橋尚好
夏合宿(常念山脈縦走)	田中亨	高橋尚好
2016年山行記録	内海	高橋尚好
	拓人	高橋尚好
表紙写真＝紀美子平からの奥穂高岳		
撮影＝竹中彰		
編集後記		
三月会通信		

52 47 47 42 38 35 35 33 32 30 29 25 24 19 18 15 13 11 9 3 2

発行日 2016 年 12 月 15 日

発行者 針葉樹会  
(会長 小島和人)

印刷所 ヤマノ印刷株

針葉樹会報  
第 137 号

編集人 岡田 健志  
〒248-0022  
鎌倉市常盤 937-53  
会報幹事／岡田健志、井草長雄  
川名真理

一橋山岳会ホームページ <http://huhac.com/>

# 思い出の私の一葉

## 雛内裏\*

高橋 尚好（昭和29年卒）

61年昔の話です。一生懸命、記憶を辿つて書いてみましょう。

現在も、細々と続いている中樹会の方々との山登り。在京の会社勤めの人たちが折にふれ、都合のつく何人かで、1～2泊の小さい山行をやつっていました。

卒業の翌年、1955年（昭和30年）、9月の連休。これを利用して、どこかへ行こうという話がまとまりました。22日の夜行で発ち翌日潤沢まで。次の日、奥穂を往復、浅間温泉に浸かり帰つて来ようということになりました。

ところが、22日の夜、新宿駅のプラットホームに集まつて中央線に乗ろうとしたところ、茫然。どの列車もあつという間に満員鮓づめとなり、あとから着いた我々はどうしてももうぐりこめない。その頃は土曜日が出勤日という職場が普通で、連休は気の遠くなるような混みようになつたのです。

さてどうしようと思案の結果、国立の部室

に泊めさせてもらい、翌朝立川からの汽車に乗り、徳沢あたりまで行き、あとは天気ませでどこかへ登ろうということになりました。

一行は、望月敏治さん（昭和25年卒）、佐藤勇さん（昭和25年卒）、鹿俣謙一さん（昭和30年卒）と私の4人でした。部室には、昔の鹿俣さんと同じように、一人住みついている学生がいることを知つていたので、そういうことになつたわけです。

深夜、部室の扉を「とんとん」と叩いたのですが、住人はぐつすり夢の中らしく、なかなか扉が開けられません。この学生がどなただったのか忘れてしまいましたが、大いに迷惑・不快な目にあわせてしましました。このことは、新部室設立祝いの折、部誌を読んだらちゃんと書かれていました。

夜中から、持参の酒を飲みながら、佐藤さんの女性論を延々と聞かされ朝を迎えるました。翌朝、立川から汽車に乗り、上高地から徳沢の小屋まで歩き、泊まりました。

次の日は、大変な上天氣でしたが、この日のうちに穂高を往復して浅間温泉まで行くのはちょっと無理だから、穂高を眺めに、長押・大滝に登つて来ようということになりました。ほとんど空身、快適な雰囲気で、一同久



大滝頂上付近にて。左から 高橋、佐藤、望月、鹿俣。昭和30年9月25日

しぶりのラクな山行きを心から楽しみました。想いの詰まった穂高連峰をじっくり眺めながら信州の山の大気に浸り、握り飯を食べ、おしゃべりをしたのを懐かしく、鮮明に思い

出します。全く楽しい3日間でした。

この4人のうち、私を除く皆さんは、もう既に故人になっておられて、86歳の今、あの山歩きの思い出を語り合うことも叶わず、ま

ことに淋しい限りです。

\*「安曇節」の一節

槍や大滝、蝶や大滝 雛内裏

6月9日(木)雨後曇り

最終案内の結果14人から参加の返事があり、当日は16時までに宿に三々五々集合しました。宿が御岳山頂にあるので、参加者のうち何人かは、ハイキングがてら登つて来る人が

### 三四郎会、御岳山宿坊に集う

幹事 佐藤 久尚（昭41年卒）

三四郎会は、坂井溢弘さん（通称、シャンさんの呼び掛けで、昭38年～昭41年卒（その後43年卒まで拡大）の現役時代一緒に山に登った、いわば「我ら同時代」とでも言える面々が、2006年3月4日に真鶴の旅館に集まって宴会、翌日、湯河原の幕岩で花見がてらのハイキングを楽しんだのが始りで、今年で11回目となる。因みに、会の名前は、開催日がたまたま3月4日であつたことから、語呂合わせで「三四郎会」と名付けられたと記憶している。

これまで過去10回、なんとか幹事を免れて



山香荘にて、2016年6月9日

いるだろうと予想していたが、この日は生憎、時々、小雨がパラつくという天気であつたため、ほとんどの人がケーブルカーを利用して山頂まで来たようであった。それでも、高崎（俊）さんと岡田さんだけは、それぞれ鳩ノ巣駅、つるつる温泉口から歩いて登つて来られました。

18時から宴会。最初に蛭川さんの音頭で乾杯した後、しばし歓談しながら宿坊料理を楽しむ。宿坊料理は、穢れを避けるという意味から牛や豚などの四つ足動物の肉を使わず、山菜を主体としたところが特徴。アルコール

が少し回ったところで各自の近況報告に移つたが、どちらかと言うと山よりも健康に関する報告が多かったのは、全員古稀を超えた頃ぶれを考えると宜なるかな。それでも酒量の方はまだ健在で、宴会の終わつた後も部屋に戻つて飲み続ける者もいた。夜遅く迄一部の部屋からはご機嫌な声が廊下の外にまで漏れ響いていた。

## 6月10日(金)薄曇り

朝食後は流れ解散とした。御岳山から下るコースには幾つかあるが、幹事としては「お勧めのハイキングコース」として、案内書に昭文社の地図のコピーを添付して、「馬頭刈尾根コース」と「つるつる温泉コース」の二つ

を予め提示しておいた。しかし、他のコースを取つても特に遭難の危険等はありそうもないでの、各自の時間と体力、好みにあわせて自由に下るということにした。その結果、数パーティに分かれてハイキングを楽しみながらお山を下ることになったが（北海道から来られた蛭川さんと小野さんは、所用ありといふことで、ケーブルで下山された）、4月の大山懇親山行の時の二の舞になるようなことはなく、皆さんそれぞれ早めに無事帰宅されたようである。

前日になつて、明日・明後日の天気予報は余り芳しくない。どうせ雨だから、ケーブルで上がるかと一時は考えたが、山登りを楽しみとする者として些か安易に過ぎるのではないか?とか思い悩んだ挙句、あの辺りの山道であれば、傘をさしても歩けるだろう、それならば不便なバスを使わず、鉄道の駅から直接歩き始められる鳩ノ巣駅からの登山道を辿ることにした。

山登りに行くのに八王子駅から、都心に向かう中央線で立川駅に戻るのは、学生時代の感覚からすると違和感があつたが、ネットで検索するとこれが最短時間と出てくる。青梅までは順調に来たが、直前に井草さんに聞いていたように、ここから先の青梅線の電車「奥多摩」行きは、この時間帯には1時間に1本位しかなく、30分近く待たされた。11時半、漸く「鳩ノ巣駅」に降り立つて、他に乗降客は誰もいない駅舎を後にする。

青梅街道を横切り、「雲仙橋」を渡つて越沢林道に入り、暫くコンクリートの林道を辿る。と、「越沢林道改修工事中」「迂回路」の標識が出て来る。「迂回路」の看板がいくつも連続して現れるので、これらの指示に従つて歩く

図を改めて見てみると、宿坊は何とケーブルの「山頂駅」の上ではないか。時間計画を大幅に変更しなければならない。

前日になつて、明日・明後日の天気予報は

余り芳しくない。どうせ雨だから、ケーブル

で上がるかと一時は考えたが、山登りを樂

しみとする者として些か安易に過ぎるのでは

ないか?とか思い悩んだ挙句、あの辺りの山

道であれば、傘をさしても歩けるだろう、そ

れならば不便なバスを使わず、鉄道の駅から

直接歩き始められる鳩ノ巣駅からの登山道を

ことにする。昭文社の地図には、このルート（「裏参道」？）は載っていないようだ。直線的な急登、長いトラバースなどを経てピークに立つた。「城山（標高760M）」だろうか。ここからは緩やかな登り下りの稜線をたどる

と、小さな「小檜峰」という鞍部にでる。霧のために全く見晴らしは効かず、登山者にも

全く出会うことなく、クマの出現が気になる

ほど、静かな山道だった。

なだらかなアップダウンを繰り返すと「大檜峰」という標識のある、大きなベンチが二つ置いてある所に出た。奥多摩湖方面からは、軽自動車なら登れそうな立派な登山道が上がってきている。ここで大休止。テルモスの温かいコーヒーとエネルギー補給に最適といわれる「アンパン」で昼食にする。この頃から雨の音が聞こえ始めるが、頭上が樹々に覆われているためだろうか、頭・身体までは届かない。1時間ほど休んで「御岳山」方面への指導標に従つて歩き出す。ここからはほぼ水平と思われるトラバース・ルートを、尾根を廻つたり沢筋を横切つたりしながら、ゆっくり辿る。だんだん霧が濃くなつて来た。ボンヤリと行燈のような、街灯のような明かりが見えると、御岳山への参道への合流点であつた。結局、鳩ノ巣駅からずっと人に出逢うことはなかつた。大きな絵看板で宿の位置

を確かめ、いきなり急になつたコンクリート舗装の道を登ると、「山香荘」の入り口に着いた。小野さんに声をかけられ、御岳山への登頂は後回しにして宿に入つた。

## 馬頭刈尾根コース

佐藤 久尚（昭41年卒）

メンバーは、佐藤力、岡田、佐藤久の3人。御前山經由奥多摩駅に下るという本間・小島さんペーティと大岳山まではコースが一緒なので、お二人を宿の玄関先で待つも、なかなか出でこないので、一足先に出発する(8:45)。宿を出て御嶽神社の階段の脇から大岳山方面の標識に従つて水平な道を進むと、「奥の院・鍋割山経由大岳山へ行く道」と、「それらを巻いて大岳山に直接行く道」との分岐点に出る。躊躇することなく奥の院・鍋割山経由の道に入る。

奥の院までは鬱蒼とした杉木立の中の急な登り。フイトンチッドを体の芯まで浴び森林浴を楽しむ気分で登り、奥の院・鍋割山を超えて大岳山に着くと(11:20)、山頂では既に本間さん小島さんが休んでおられた。お二人は巻き道を通つて来た由であるが、まさか先に着いているとは思わなかつた。意外や意外。

お二人は山頂で休んでいる間、遠くに見える御前山の方を見ながら、「あそこまで行けるかなア」と弱気なことを言つていたが、最後は「よしつ」とばかりに気合いを入れて、先に出発して行かれた。

山頂でお二人の出発を見送つた後、我々は馬頭刈尾根コースを辿る。このコースは会社に入つたばかりの頃、会社の山岳部のハイキングで十数人の若い女性（中には気になる子も複数いた）と一緒に楽しく歩いたことがあり、それ以来50年ぶり。昔の思い出に耽りながら小さな凹凸を超えて行くと、1時間20分で「つづら岩」に着いた。つづら岩は、現役の頃、何度か岩登りの練習に来たことがある懐かしい所なので、休んでじっくりと岩との対面を果たしたかったが、バスの時間に追われていたので、数秒間立ち止まって岩を見上げただけで通り過ぎた。(つづら岩は周りの木々が大きくなつたせいか、スケールが小さくなつた感じで、昔のすつきりした岩壁の印象がない。下からルートを目で追つてみたが、昔登つたルートなど全然思い出せなかつた)。つづら岩を過ぎてちょっと行つたところから、千束への下りの道に入る。昔はつづら岩からの下りは、灌木に捕まりながら落ちるようにして下つた記憶があるが、今は檜の養殖林の中に立派な道が着けられており、難

なく千束のバス停まで下る」ことができた。14:24 発のバスに間に合い武藏五日市駅にて無事帰宅した。

## 御前山コース

本間 浩（昭40年卒）

メンバー 小島和人、本間浩

コースタイム 御岳山・山香荘（8:50）—2

時間5分 休み①—大岳山（10:55 11:20）

—3時間25分 休み④—御前山（14:45  
14:55）—55分—トチノキ広場（15:50）＝

タクシー 鳩ノ巣駅

天気が良ければ、前日に奥多摩湖から大ブナ尾根を御前山に登つて、柄寄に下り、翌日10日は、前夜の飲酒を考慮して最短距離、宿から大檜崎経由で鳩ノ巣に下る予定でした。駅前の大橋食堂で小島さんとお互いの健脚を讃え合い、美味しい昼酒を戴くつもりだったのに。雨の予報で！

奥多摩には三山が三つあります。高水三山・戸倉三山・奥多摩三山の計九山の内、小生登つていはないのは「御前山」だけなのです。この機会に行かねば死ぬまで登れないことでしょう。「山香荘」から御前山へは大岳山経由

しかルートがないのですが、如何せん長い、見るからに長い、途中昇り降りも多いだろう、行けるかなと不安を抱えながら（内心では、駄目なら鋸尾根を下ればイヤと）出掛けることにしました。

5～6年前、学生の米田君と、御岳山から大岳山、馬頭刈尾根を軍道まで下ったことがありましたが、その時の印象ではつづら岩の怖さとその先バス停まで長かった事しか頭に残つていませんでした。大岳山までは同じ道を歩く「つづら岩」チームが先に宿を出でしまつたので、遅れまいと御岳山神社には寄らず下の道を行きました（彼らは神社から鍋割山経由の上の道を行つただろうと）。

芥場峠から先が、特に大岳神社から先が岩がちのこんなにキツイ登りだったとは！山頂が近いのが分かっているだけに休むに休めず1時間5分も歩かされました。救いは前夜の酒の気がすっかり抜けたことです！ 駅前の大橋食堂で小島さんとお互いの健脚を讃え合い、美味しい昼酒を戴くつもりだったのに。雨の予報で！

流のようです。鋸山を巻いて間もなく車道に出、これから鞘口山、クロノ尾山と御前山への長い登りが続きますが、比較的緩やかで土を踏んで歩く良い山道と言えます。尤も柄寄分岐から先の最後の登りはさすがキツカソタですが。

山頂は眺めも良くなく、3時前という時間も時間なので一服してすぐ降りました。分岐から直ぐに避難小屋があり窓から覗くと板敷で10人以上は泊まれる綺麗な小屋です。学生さんがここを使えば1泊2日で奥多摩三山、三頭山（1531m）御前山（1405m）大岳山（1266m）の縦走が出来るなどと話しながら下つていくと、60リッター位のザックの二人組とすれ違いました。時間から診て、連中今夜は小屋で酒盛りだなーと。やがて登山道に「体験の森」の広い林道が交錯はじめ、タクシーを呼ぶ都合上林道を下りました。ただ地図・看板案内図を見ても位置関係がよく掴めず、取敢えず「森」の一番下とおぼしき「トチノキ広場」に向かいましたが、ここは東屋付きで車の折り返しも可ないのでここで車を呼び、着替えも済ませました（しこたま汗をかいていたのでまさにイイ気持ち）。待っているのも疲れるので下ると工事の車と云い現在道路は閉鎖中と聞く。ゲートまでは30分以上も下ると聞き、ヤツキ

りするが工事の若い女の子が乗つけてくれること（菩薩に見えたネ）。

鳩ノ巣の大橋屋に着いたら、井草さんが仕事仲間と飲んでいる処に出会う。それに半分加わりながらビールで疲れを癒す。例によつていろいろツマミが出て来るのだが、疲れたせいか箸が動かずもっぱらビールを飲むだけ。井草さんは今日枝打ちをやつてきた由。

花粉を減らすため、木が生きるギリギリまで枝を落とす。そこで、杉・檜が裸で帽子だけをかぶっている状態を想像すればいいのか？

近々「わさび」の植え付けを行うとのこと。

帰りが長いし疲れもあり、1時間位で切り上げる。天気予報を信じなければもっと楽な山行を楽しめたのだが、人がイイもんでつい口車に乗つてしましました。しかし小島さんにとっては来月の幌尻と8月の聖・赤石、小生にとつても聖・赤石が控えており、そのための良いトレーニングになつたこと確かで、それなりに有意義な山行だつたと云えるので

山歩きを浪人中の奥多摩登山で始めたので、思い入れがあり奥多摩が好きです。山香莊も今回が3回目で、久ちゃんがここを会場に指定した時、「やつた」とよろこびました。帰路を鳩ノ巣への裏参道としたのは、(1)下りだけで楽そうだ。(2)途中で越沢バットレスを通る、というものです。学生時代の岩登りトレーニングは、ほとんどが葛籠岩で行われましたが、あそこはアプローチが長く、その割にはルートが単調で不満がありました。卒業後組んだ相棒に越沢に連れて行かれ、アプローチの楽さ——鳩ノ巣駅から1ピッチ、又当時は立川から乗り換えなし——と、ルートが結構バラエティに富み、スリルがある登攀が楽しめるに驚き、良く行きました。三ツ峠も好きでしたが、越沢は近いので帰りにゆっくり一杯飲めるのも楽しみでした。

という訳で皆様と別れたのが9時少し前、11時半位に鳩ノ巣へ着くだろう、とウキウキと歩き始めました。花は大したものがありませんでしたが、鳥の囀りが楽しい。鶯は当然としてセンドライムシクイ、コマドリ、ボ・ボ・ボと鳴いているのはツツドリか、やませみが眼前を飛び、足下から山鳥が飛び立ちギョッソが眼前に広がつていました。右の凹角ルート、真ん中の大ハングルート、左のスラブルート、いやあ懐かしい！あの中央の大きなハ

あるよ」と注意されていましたが、余り気にしていませんでした。

## 鳩ノ巣、裏参道コース

原 博貞（昭41年卒）

皆様、いろいろ有難うございました。私は

ングです。私がぶら下がっていると、相棒が「おい、対岸を見てみ！」と言うので振り返るとアベックが今まさに愛の交歎を熱烈に開始していたのです。「ひやあ」と喜んでいると、腰のゼルプストのカラビナが変な音をたてます。なんだ？と見てみると安全環が外れ、今までに開こうとしているではありませんか！ぎやあ、と叫び、慌てて直し、邪心を捨てて登りなおしたものでした。

そういうノスタルジーをしばし楽しみ歩き出すと、すぐに幅広い舗装道路になつていました。どたどた下り、雲仙橋を渡り、青梅街道を渡ると鳩ノ巣駅で、時計を見るとカツキリ11時半でした。缶ビール2本で一人乾杯しつつ一本間さんと小島さんは、やつと御前山の登りについていた頃では？まだ先は長い。馬頭刈組は葛籠岩に着いただろうか？そこからが大変だよ。ウフフ。日の出組はもう下山しただろう」と山友の行方に思いをはせつつ私の山行は終わりました。皆さま、ご苦労様でした。

## つるつる温泉コース

池知 昭洋（昭41年卒）

私たちのグループは坂井さん、半場さん、

池知の三人。それぞれ浜松、真鶴、寒川という西の住人で、『いか三』だけで一緒にと私が気に入っていた方達でした。

九時少し前に山香荘を出発し、日の出山へ向かつた。丸太で作った長い階段に苦しめられながら約40分で東雲山荘前のベンチに到着し、ここで小休止。その後全員で山頂に向かつた。山頂からの眺めはもう最高！それまでの肺の苦しみが消えエネルギーが身体中に漲つて来るを感じました。ここで高崎、

中村（雅）の二人は、私たち三人を気にしながら三室山経由で日向和田駅へと下りていった。「残された三人」は、『サア、ここからが本番』と言う覚悟で下り始めました。少しでも勾配の少ないならかなところを選び、お互いに『こっちの方が降りやすい』と叫びながらの下山でした。滝本に着いたときの喜びはまた格別！11:00 つるつる温泉着。お互いの健闘を讃え合い蕎麦を肴にビールで乾杯、13時のバスで五日市駅へ向かつた。

今回の山行では二つの偶然が重なり、『もしかして山に復活できるかも』と思うことができました。ありがたいことです。一つは、同室の久さんが出发間際に膝にサポートーーを巻いているのを目撃したこと。もう一つは坂井さん、半場さんの健脚を目撃したことです。翌月の7月針葉樹会総会で上京した時、石井

## 三室山・吉野梅郷コース

中村 雅明（昭43年卒）

御岳山からの下山コースとしてA（大岳山（つづら岩～千束）、B（日の出山～滝本（つるつる温泉）、C（御岳神社周辺散策～ケーブル駅）が用意されていましたが、A、Bとも最近歩いているので、日の出山までB班に行し、そこで皆さんと別れた日の出山から三室山（御岳山～日の出山～三室山縦走コース）、三室山から吉野梅郷に下り日向和田駅に出る（吉野梅郷コース）ことにしました。9日晚の総会の最初にどのコースで下山するか皆で手を上げましたが、私のコースに高崎さんが同行していただけることになりました。

10日9:00 前に宿坊「山香荘」で解散、それぞれのコースに別れました。

高崎さんと私はつるつる温泉に下る坂井さ

ん、半場さん、池知さんと一緒に日の出山に向かいました。日の出山に近づくと岡田さんに教えてもらったアジサイに似た葉に小さな白い花がびっしり着いた木が、沢山目につきました（後日「コアジサイ」と判明）。この花は日の出山の先でも見ました。約40分で東雲山荘近くのベンチに着き小憩後、日の出山頂へ。天気良し、展望良しでゆっくり休憩した後、つるつる温泉に下る3人と別れ、三室山に向かいました。このコースは守屋益男『奥多摩東部登山詳細図』にグレード=A（良く整備された登山道）、家族・一般向け人気コースと書かれています。

頂上直下の急な下りを終えると歩きやすい緩やかな下りが続きました。竜の髭、高峰と二つのピークも巻くので楽です。また、樹林の中の道なので初夏の強い日差しも遮られ、涼しい風も吹き渡っていたので心地良く歩けました。自然に足が出る下り、2人なので話が弾みました。何故か、山での墜落（転落）の話になり、中村が、自身の大学4年7月の北岳バットレス中央稜取り付きでの転落、一昨年4月の大峯奥駈道の丸木橋からの転落、同期の加藤の大学3年3月の人本歯での転落事故、金成の大学2年5月の東鎌尾根よりの滑落を話し、高崎さんが石田さんの大学4年9月の一ノ倉沢衝立岩での転落、原さんの大

学4年12月の涸沢岳西稜での滑落の話をしました。お互いに初めて聞く話もありました。遭難になるかどうかは紙一重、運次第：石田さん、加藤、金成は若くして病没し悪運の強い原さん、中村が生き残っている：中村は今度転落したら運を使い切ついたらアウト：過去から現在に話が移つてこの話題終わり。

三室山の頂上を巻いた処で一服した後は急

な下りになりましたが順調に下り、鳥居のある登山口に11:30頃に着いて下山終了。2月下旬～3月中旬には120品種1500本の梅が咲き誇つていた「吉野梅郷」梅の公園（2014年にプラムボックスウイルスの感染により全伐採）を横目に見て吉野街道を横切り多摩川を渡つて日向和田駅に12:05着。日の出山から2時間15分。ほぼコースタイム通りのんびり下山でした。

学生時代の「一定時間歩いては一定時間休み、『景色なんぞは夢のうち』という歩き方」に対し、長老組の「実に早い。そしてほどんど休まずに歩き続ける。そのかわり、景色の良いところへ出ると、思いきり腰をおちつけてザックを広げる。それこそ山を楽しんでいる歩き方だ」と描かれている（針葉樹会報第13号「五月の五龍」）。

今の自分の山歩きを振り返ってみると、昭文社の「山と高原の地図」等にあるコース・タイムと比較して「未だ未だ大丈夫」とか「今回は負けた」とか、どちらかと言うと学生時代の延長のような登り方をしている。もういい加減良い年齢になつていて、「山登りの楽しみ」を十分に味わつていらない事に気がついた。

これではいけないと反省して、「長老組」の様に楽しんでみようと考えた。この季節、まだ山に入れば雪も踏めるだろう。頂上にガス・ストーブとコツヘルを運び上げて暖かい飲み物を作つてみようか。気の向くままに、時間に囚われず、丸一日を山で過ごそうと、移動性高気圧の下の好天の日を待つことにしました。3月の初旬に候補となる気圧配置が見えて来たが、家族の都合とタイミングが合わず、その時は諦めた。翌週、理想的とは言えないまでも、それなりの好天が見込まれると踏ん

## 雪の天狗岳

高崎 俊平（昭41年卒）

「針葉樹会報」に中島（寛）さんの文章で、

で出かけた。選んだのは八ヶ岳連峰の天狗岳。

初めて雪の天狗岳に登ったのは2009年2月。佐薙さん、蛭川さん、竹中さんに連れられて夏沢鉱泉に泊り、オーレン小屋・箕冠山・根石岳経由で東天狗岳まで往復した。随分長い間触っていなかつたピッケル・アイゼン・目出帽を引っ張り出しての本格的な冬山だつた。根石山荘の上のコマクサ保護地となつてゐる稜線では烈風に吹かれて苦労した。

その後、昨年の春、岡田さん、中村（雅）さんと、2泊3日で美濃戸口から入山、赤岳鉱泉と黒百合ヒュッテに宿泊、硫黄岳・夏沢峠経由で東・西の天狗岳を踏み、黒百合平経由で渋温泉に降つた。これ以上は無いと思われる好天に恵まれた山行だつた。その前の週には、前神さんが引率し、黒百合平に幕営して雪上歩行訓練をする学生の合宿に少しでもお手伝いが出来るかと同行を計画した。この時は自分の装備の欠陥のため支援が果たせず、一人で東天狗岳を往復する結果になつてしまつた。これらはいずれも「長老組の楽しい山登り」と言えるような範疇には入らない。

前夜、茅野市内に宿泊、夜は雪になつた。

翌朝、6時に宿を出て渋温泉に向かう。道路は除雪が終わつて順調に走ることが出来た。道路が狭くなつて、除雪の十分でない区

間を通過して渋温泉に着くと「今は駐車出来ないよ。これから重機で除雪するから。2km位下の広くなつた道路脇に停めな。途中の待避所はダメだよ」と冷たく指示された。歩いてみると約15分の所だつたが。

バス停のある渋温泉に戻ると、同じように道路脇に駐車してここまで余計に歩き、いざ出発しようとしている2人組と思われる3人4ペーティーが目に入つた。空模様はというと、今は雲の動きの激しい曇天だけれど、天気予報では「午前中から晴れるだろう」だったので、また、黒百合ヒュッテまでは危険な箇所もないのに出かけることにした。登山路には昨夜の降雪の後の踏み跡は未だ無いようだ。積雪が20～30cm位だとしてもラッセルは大変なので、「誰か先に行かないかな?」と思つて待機していたが、皆同じように考えていたのか、誰も真っ先に歩き出す気配は見えない。仕方無しに、登山届をそれ用の箱に差し入れ、手摺りの付いた雪の積もつた小さな歩道橋を渡り、出だしからいきなり急傾斜の、トレースのはつきりしない登山道を辿り始めた。

久しぶりに先頭でラッセル出来る心地良さと、何處まで保つかという不安を抱えたままで暫く歩いていると、直ぐに後続の4人組（二人組の2ペーティーと後で分かつたのだが）

に追いつかれた。横に避けてやり過ごし、ホツとし、少し樂になつて彼らの後を少し間を開けながら追つて歩いた。すると5分も行かないうちに、同年代と思われる年配者とその子供かと思える若い人の2人組が休んでいた。素直に追い越してまた10分も行くと、今度は先行する若い男性2人組が「熱くなつたからアウターを脱ごう」とか言つてザックを下ろし、休憩に入つてしまつた。前には誰もいなくなつた。止むを得ず再び先頭でラッセルする羽目になつた。結局このままラッセルを続け、黒百合ヒュッテまで汗を流しながら、楽しさと辛さを味わい続ける事になつた。

黒百合ヒュッテの玄関前で、雲行きを眺めながら逡巡していると、後続のペーティーが少しずつ到着し、同じように迷つてゐる。小屋番の若い女性も「今朝の予報では晴れると言つてましたねエ」と慰めるよう言う。テルモスの暖かいコーヒーを飲んだり、アンパンを頬張つたりしながら、冷氣と戦つていだ。1時間ほど経過して、スノーボードを背負つた若い二人連れが上に向かつて出発すると、残りのペーティーもそれぞれに動き始め、私も「天候が悪くなつたら引き返そう」と、アイゼンを履いて後に続いた。小屋の前の温度計はマイナス8℃を指してゐたが、風も気にならない程度で、霧で視界が全く効かない

事を除けば、先ず先ずの登山日和と言えるのだろう。

東天狗への上り道は、多分、黒百合ヒュッテに宿泊して、朝一番に登頂した登山者のものだろうと思われる新しい踏み跡が出来ていた。樹林帯を抜けると、柔らかい乾燥粉雪に足場が定まらず、所々トレースも消えていて、苦労しながら結構な急斜面を登る。

東天狗の頂上に至つても、隣の西天狗も姿を見せず、天候回復の兆しも見えず、折角持ち上げたストーブとコップヘルを使って暖かい飲み物を作る氣にもなないので退散することとした。南側、根石岳からの登山路は、東天狗の直下が雪庇のように張り出した雪壁になつていて、このルートからの登頂は難しかろうと思われた。登りの時に「ここは傾斜がキツイな」と思つていた場所は、下りになるとより急に見えて、クライムダウンを強いたられた。この辺りから上つて来る登山者の数が少し増え始めた。

樹林帯に入った所でアイゼンを脱ぎ、中山峠を通過して、黒百合ヒュッテまで帰り着いた。人の居ない広場のベンチで大休止。スノーボードを持って先行し、西天狗の斜面を目指した。パートナーが「ホワイトアウトで怖かった」と言つて降りて來た。小屋の前で寒い中、長居する必要もないでの、渋温泉に向かつて

今年の「赤木沢隊山行 聖・赤石」に参加を許された。

赤木沢隊は、小島・中村（雅）・川名の三氏がかつて数年掛りで赤木沢の遡行をなしとげ、次に「加賀白山」そして去年南アに転じ、荒川三山から赤石岳を歩いた。2年目の今年は聖光小屋から主稜線を光岳に南し翌日北上、聖・赤石と廻り小渋川を下ろすという、昨年と併せ南ア南部を繋ぐスバルシイ（すざまじい）計画であった。

小生、「赤石・聖」は3年秋の合宿以来で、その時のメンバーは長沢・小野・石田・本間

下る。途中、明日の登頂を目指すのだろうか、大勢の老若男女とすれ違つた。

結局今回も、天候に恵まれなかつたこともあって、長老組のように「山登りを楽しむ」には至らなかつた。次回は楽しい山行にしたいものだ。

## 「聖・赤石行」報告

本間 浩（昭40年卒）

の4人で、荒川三山から光岳までの所謂「南ア南部縦走」であった。最近北部の北岳・塩見・仙丈は歩いたがその南はご無沙汰で今日は正しくセンチメンタル・ジャーニイ。

小生は慣れぬ沢下りは敬遠し、赤石岳を登つた後は赤石小屋分岐で別れ東尾根（大倉尾根）を降ることとした。この山行は降りだけなく、登りが一段と厳しく感じられた。

2日目聖光小屋から光小屋まではコースタイムで約9時間、これに休み時間と高齢割り増しをプラスすれば12～13時間の行動を覚悟しなくては！ 覚悟だけでは持たないので早速丹沢で1日10時間行動のトレーニングに入つた。効果の程は？だが、ナント力持つだろうと云う樂天的な気分になつたような気がする。

出発前の聖光小屋への宿泊申込時に、管理人が亡くなり現在休業中と聞き、山行内容からテント持参は無理と判断、ルートを変え檍島から聖平小屋に入ることになった。

その後、山中では毎日3時過ぎに豪雨に見舞われ、沢も増水しているだろうと思い、小渋川コースを東尾根へと変えた。このような事情で当初プランから大きく変わつたが、南アルプスの大きさ・辛さは充分に味わうこと

メンバー L中村雅明、小島和人、本間浩

#### 1日田 7月31日(日)

静岡 (9:50) ⇒ 路線バス ⇒ 畑薙第一ダム

(13:15 14:25) ⇒ マイクロバス ⇒ 横島

ロッジ (15:30) (泊)

バスを乗り継いで「横島」に入るのだが、乗り継ぎ地の畑薙第一ダム（仮停留所）での客扱いは如何なものかと思う。ピーカク時にお客様全員を満足させよ、とは云わないが、ベンチも屋根も無い所に1時間以上放りっぱなしとは酷くないか！

#### 2日田 8月1日(月)

横島ロッジ (6:15) ⇒ マイクロバス ⇒ 聖

沢登山口 (6:25 6:30) ⇒ 吊橋 (8:20) ⇒ 滝

見台 (11:50) ⇒ 遭難碑 (13:10 13:20) ⇒

聖平小屋 (14:30) (泊)

ロッジの車で登山口まで送つてもらい、登りにかかる。聖沢沿いに山腹を緩やかに登るものと思つていたが、支尾根を乗り越え沢を渡り、時には沢がかなり下に見える」ともあるような山道で結構消耗する。遭難碑のある岩頭展望台の手前で雨が降り出し雨具をつけがやがて止む。尤も雨具をつけないとビショヌレになる位一時的だが激しい。聖沢の源流部に入るとゆるい登りになり、そういう

する内に聖平小屋に着く。間もなく豪雨となり、これが夜通し続く。昼過ぎに一時的な雨、3時頃から豪雨が続く、が今山行の降雨パターンのようだ。

小屋は大型で居心地良く、食事も悪くない。歩き初日のせいか、何時の間にか寝込みそのまま寝続けた。

#### 3日田 8月2日(火)

聖平小屋 (泊) ⇒ 往復 ⇒ 南岳手前

朝になつても豪雨は止まない。出掛けるパーティも結構多いが、我々は無理をせずに今日は沈没とし、明日の天気に期待することとした。7時過ぎになると雨は上がり、日も差し始めてきた。そこで聖岳の反対・上河内岳方面を行つてみるとした。上の途中でも聖岳は見え、南岳の手前に北方が見渡せるポイントがあり、ここで大休止し、軽く食事をとる。一登りで南岳だが「行け」などと云う声も上がらず、いいで引き返す。

#### 4日田 8月3日(水)

聖平小屋 (5:00) ⇒ 小聖 (6:35 6:45) ⇒ 聖

岳 (8:20 8:50) ⇒ 兎岳避難小屋 (11:20

11:35) ⇒ 小鬼岳 ⇒ 中盛丸山 (14:15 14:25) ⇒ 百聞洞山の家 (15:30) (泊)

一日休んでの出発。小聖まぢ林の中、その

先は岩山の道を山頂へ、1000m弱の登りは流石に疲れる。奥聖はバスしたが、今日のハイライト部分は無事クリアー、後は降るだけと思うとどこかホントする。アニハカラヤ今日の難場はここからだつた。小さな降りと登りを繰り返しながらこの下りが凄まじい。バテバテの状態でやつと聖兎のコルヘ (10:50)。赤石岳の名の由来のラジオラリヤの赤い岩石が周りを囲んでいるのも異様。ここで一休みして兎岳の登りにかかる。下りも急だつたが登りも急で、息継ぎに立ち休みしながらヤット山頂に。この先小兎岳、中盛丸山と降り登りを何度も繰り返し、大沢山はバス (14:30)、途中豪雨に見舞われながら百聞洞山の家へ。この山小屋は小造りな4階建てだが内の施設（食堂・談話室・トイレ・乾燥室等）は充実していて、圧巻は夕食の「トンカツ」。余計な説明はしない、是非食べて欲しい。この為だけで泊まる価値がある。ついでに聖なり、赤石なりに登ればより一層の欲びではないでしょうか。

#### 5日田 8月4日(木)

百聞洞山の家 (5:20) ⇒ 百聞平 ⇒ 赤石岳

(9:30 10:30) ⇒ 東尾根 ⇒ 富士見平 ⇒

赤石小屋 (13:30) (泊)

山の家から1時間半位で百聞平へ。今山行

唯一のオアシスで気が和み、ノンビリ一休みする。赤石の登りは山腹をグルリと一廻りしながら山頂に立つと云う感じで、疲れよりも山頂がナカナカ近づかないという苛立ち感の

内は有つてもイイのでは?と思つた。その点  
今回は中村さんが緻密に調べてくれていたお  
陰で戸惑う事なくスムーズにすんだことに  
は感謝します。

「聖・赤石行」前後記

中村 雅明（昭43年卒）

## 1. 山行の企画・準備

東屋根の下には急がが途中は小瀬の水場  
富士見平等、休み処も適宜有り、退屈しない。  
赤石小屋は取り立てて言う事も無いが、め  
ずらしく混み合つていて「刺身」で寝ること  
になった。今山行の山小屋の食事は、丹沢や  
富士に比べれば上々で赤石小屋も例外ではな  
い。

赤石小屋(5:50)～樺段～樺島(9:10)＝マイクロバス(12:30)＝畠薙第一ダム(13:30)14:25)＝路線バス＝静岡(17:30)緩やかだが長い下りを樺島ロッジへ。先ずシャワーを浴びその後お互いの健闘と無事を祝い乾杯。バスを乗り継ぎ静岡へ。  
樺島ロッジは設備・食事等に不満は無いが、ロッジ外の諸施設、マイクロバス乗車等の案

本山行は昨夏、光岳までの縦走が果たせなかつた樺島から下山の帰りに小島さんと「来年は易老渡から入山し、光岳・茶臼岳・聖岳・百間洞まで北上する雪辱戦をやりましょう」と約束したことからスタートしました。

コースはウエストンが赤石岳登頂（1892年）に利用したことで知られ（注1）、赤石岳への最短の登路で、樅島からのコースにその地位を奪われるまではメインルートでした。昭和初期にこのコースから赤石岳、荒川岳を目指した紀行が『針葉樹』第4～6号に載っています（注2）。



聖岳頂上にて

入山し小渋川を遡行し広河原小屋（泊）、その後沈澱日3日を交えて5泊6日で大聖寺平から赤石岳往復、荒川前岳から三伏峠まで縦走し鹿塙に下山しました。

ところがこの山行の記憶といえば、午後遅くの赤石岳の頂上でのかすかな記憶しかありません。秋の冷たい小渋川の渡渉体験は1年生にとつては鮮烈だったと思いますが全く記憶がありません。実の所、今年の新年会で原さんからこの山行のことを知られ、小渋川からでなく三伏峠から入山し、高山裏避難小屋から赤石岳を往復したと思い込んでいたことを思い知りました。この山行で一緒だった石田さん、加藤、金成両君は早くに他界しました。従つて小渋川を下つて下山することは、(1)大先輩の足跡を偲ぶこと、(2)自分が歩いたコースの再訪、(3)3人の慰靈の意味があります。

以上から小渋川を下る思いが強くなり、3月中旬に小島さんをお誘いしたところ、小渋川下山コースに賛同していただきました。朝日連峰から夏山を共にして来た川名さんの意向を確認している内に、5月中旬に丹沢大山に本間さんと一緒した小島さんがこの計画を本間さんにお話したところ参加を希望されました。勿論大歓迎です。本間さんは沢の遡行を行わない方針ですので、赤石岳の先の大倉

尾根下降点まで2人に同行し、その後別れて大倉尾根（東尾根）を赤石小屋経由で樺島に下る事になりました。川名さんも一緒になら心強いと川名さんの参加を要請しましたが、仕事の調整がつかず残念ながらそれは叶いませんでした。

当初設定した日程は8月4日～10日でしたが、梅雨明けが7月25日頃の予報が出たので出発を早め7月31日～8月6日に変更しました。さらに出発直前に想定外の事態が発



百間平にて

## 2. 山行を終えて

後半の目玉であつた小渋川を逃しましたが、百間洞から聖岳までつながったので満足しています。これで茶臼岳までの稜線トレースができたので、来年は南アルプスの南部縦走を完了する目途がつきました。畑薙の茶臼岳登山口から茶臼岳に登り、易老岳～光岳まで縦走し、さらに池口岳まで足を延ばそうと思います。

今年の夏山は従来の梅雨明け後に太平洋高気圧が日本列島を覆つて、連日好天が続くパターンが崩れて不安定な天気が続きました。本間さんがお気の毒だったのは、聖岳、赤石岳の頂上からの大展望が得られなかつたことです。この不安定な夏山は今年だけの例外で

生し、前半の行程の変更を余儀なくされましたが、それは本間さんの報告をご覧ください。

（注1）ウエストン 青木枝朗訳『日本アルプスの登山と探検』 岩波文庫

（注2）『針葉樹』第4号 磯野計藏・近藤恒雄「晩春の塙見赤石縦走」

『針葉樹』第5号 芹川稔一「小渋川に沿いて」

『針葉樹』第6号 園山徳三郎「春の赤石聖岳」

赤石岳頂上にて

2016.08.04 09:55

赤石岳頂上にて

なく、これからも続きそうですので夏山の日程が組立てにくくなり困ったことです。

昨年から南アに戻りその深さ・雄大さを堪能していますが、南部縦走を完成した後も楽しみが残っています。北沢峠から仙丈岳に登り、仙塩尾根を塩見岳まで縦走して蝙蝠岳から二軒小屋に下りるコース、白峰三山から南へ転付峠まで続く白峰南嶺コースに心惹かれます。いずれもこの歳では厳しいコースですが、75歳までトレースしたいと思います。



## 幌尻岳・神威岳行

宮武 幸久（昭45年卒）

2016年7月4日

羽田発8時半SKY705便は順調に飛行し10:35 新千歳空港に到着。迎えに来られた

小野さんのウインドブレーカー姿に驚かされると同時に私自身3度目の北海道山行に

「やつと来たんだ」との実感がわいてきた。今回参加者は 小島さん（40年）、佐藤久さん（41年）、岡田さん（42年）、中村（雅）さん（43年）と私の5人で幌尻岳・神威岳を、

小野さんの会社時代の後輩手塚さんが後半の神威岳のみの参加となつた。当初足の便をどうしようかとフエリーとかレンタカーをと思案していたが手塚さんが前半部の送り迎えもかつて出て頂き昨年同様大変お世話になることになりました。

一行7人は手塚車で平取町とよぬか山荘へ。途中、川の流れとか濁り具合を見ながら明日からの渡渉に思いを馳せながらチエックインの3時前にとよぬか山荘に到着。小野さ



7月5日晴れ

とよぬか山荘で朝食のあと9時半発シャトルバスで約50分、終点第2ゲートまで。第2ゲートよりいよいよ今回の歩行開始。北海道電力の取水施設までは単調なというより第2ゲートまでより広くいい道でなんでここまで

バスが来ないのかとブツブツ言いながら  
12:50 取水施設通過。

（）から林道と別れ額平川右岸の小道に入り約1時間行つたところで渡渉準備。14時いよいよ幌尻山荘までの高低差約250メートルの渡渉開始。最初は何とか濡れまいとするも、すぐに腿あたりまで水につかり、こうなりやと観念して進む。おぼつかなかつた渡渉もしばらくするとやや下流に足を運べば水の抵抗が少なくすむとか直角に見下ろすと川底がよく見えるとか段々慣れてきたと思つたら足をとられて腹這いに。大先輩の記録に渡渉回数20回とあつたので話のタネと思い、数え始めて17回、あれやこれやで濡れたシャツも乾き始めた15時半、本日の宿營地標高960メートル幌尻山荘到着。幌尻山荘では雨降り以外、調理も食事も野外とのことでビニールシートの上で食事の準備開始。今回の自炊にあたつて献立をどうするか、何年も自炊の経験がなく諸先輩の顔を浮かべながら迷つてしまつたが経験の豊かな中村さんに全面的依存し、軽量化を優先し朝昼晩ともお湯を注げばすむ物で統一しましたがさすがに注文もなく無難にすんだのかと思つています。

夜は用意された短冊状の毛布を下に敷き夏用のシュラフで寝たが寒く、もつ一枚セーターでもと思うぐらいであった。

### 7月6日曇り時々小雨

朝食後6時半小屋を出発。間もなく小雨が

降り始めるがそのまま進む。標高1500メートルあたりからハイマツが現れた。昨年の十勝岳周辺では1000メートルあたりだつたので随分と違う。この日高地区は北海道でも少雪地帯であるとのこと。やはり太平洋の暖流の影響なのか。命の水8時半着、小休止。道から外れた斜面に上部の雪渓からの水が飲める。

命の水からワンピツチいつたあたりで稜線



幌尻山荘にて。7月5日

にでる。雨も上がり雄大な北カールをはさみ幌尻岳が見える。

馬蹄形の稜線を時計と反対回りで頂上へ向かう。11時、標高2052メートル、北日高地区の名峰幌尻岳到着。快晴ではないもののお陰様で北に大雪山系の山々、北西には夕張岳、芦別岳が見える。11時半風がやや強くなつたので下山開始。13時、命の水。途中で食べた昼飯について一言。これもお湯を注げばすぐにできるものだが、味といい三角形の形といいコンビニの握りよりおいしい。五目・鮭・野沢菜と種類があるが特に五目がおいしく、これらの参考に思つています。

14:15、幌尻山荘着。今日は雨模様なので小屋内で食事。ストーブで濡れたものを乾かしながら、ないと聞いていたビールがあつたのでは乾杯。その後食事・就寝。幌尻山荘はやはり平取町町立で完全予約制で50人収容、管理人一人で運営。この日はツアー客もいて40人ぐらいとのことです。

### 7月7日曇り

朝食後5:40出発、すぐに渡渉開始。昨日の雨の影響もなく水量は来た時とあまり変化はなかつた。渡渉回数のカウントには中村さんも加わり終了時にはなんと20回丁度。大先輩の記述の正確さに改めて感じ入りました。

7:40、取水施設着。この後単調な林道を第2ゲートへ。10:10、第2ゲート着。11時シャトルバス発、12時とよぬか山荘着。

ここで手塚さんと合流し手塚車で南下し国道235号へ。途中食料の買い出しをし、荻伏を左折し一路神威山荘へ。神威橋を渡り林道をしばらく行つたところでちらを見てい

る熊に遭遇。逃げる熊を追走したがすぐに見失う。この時はこちらが車の中だったこと、まだ子熊だつたことから恐怖感はなくむしろ初めてみた新鮮さがあった。しばらくして無



神威岳頂上で、7月8日

人の神威山荘（標高約400メートル）に到着。夕食は手塚さんお手製のすき焼き、コメから炊くごはんやはり違う。そして何よりなのは昨年もびっくりした冷たい生ビールの飲み放題。改めて感謝いたします。

#### 7月8日曇り

今日も前半ニシユオマナイ川の渡渉、後半神威岳への登山の標高差1200メートルのコース。5:15、渡渉スタイルで出発。しばらく笹の群生地を歩くと一行の誰彼となくやーとかオーとか声がかかり始めた。笹といえば熊の大好物であることを思い出したのは私一人ではなかつたようである。沢は昨日の額平川に比べそれほど深くもなく順調にすすむ。5:24メートル右からの沢の合流点を通過。しばらく探し回つたが、合流点から少し進んだ右岸にある大先輩大塚武さんの遭難碑前に

7:15到着。

大塚さんが亡くなられてから三十三回忌にあたるという。少し茂った草を整理し、お線香とワンカップで追悼。ワンカップは持ち帰ることのこと。小島さんによると、大塚さんは酒は全く嗜まれず、当立場上多くの贈答品が有り余つていて、小野さん達後輩がその中から好きなものを持ち帰つていたそう。OB達の楽しそうな交流が偲ばれ、ふと私の1年

上の加藤さんのことが頭に浮かんできた。加藤さんは残念なことに早く逝つてしまつたが札幌での生活はさぞや楽しいものだったはずです。

小野さんに渡すワンカップをザツクにしま

い出発。7:10メートルの二股を右に進む。

8:40、尾根の取りつき点到着。標高差約800メートルの登山開始。両側が笹やぶで人ひとりが通れる程の狭い急登を歩くがどうも様子がおかしい。経験上どんなに急登でもいつもでも続くことはなく、必ずやや平坦などころが現れるはずである。ところがここは行けども行けども急登ばかりが続き、休憩も斜面に一列縦隊でとらざるをえない。こんな状態が頂上近くまで続き悪戦苦闘の末12:20やつと標高1600メートル、南日高地区の名峰神威岳頂上に到着。雲間に日高山脈が連なり、襟裳岬方面にアポイ岳を見渡すことができた。

13時頂上発、もう最初から笹を両手でつかみぶらさがるようにして下る。ただただ黙々と歩くのみで沢の音が近づいた時はさすがにほつとし、ようよう14:50、尾根の取り付き点到着。ここまで沢の水はよくないとのことで自重してきたのが委細構わずがぶ飲み。沢靴に履き替え下り開始。途中16:20、遭難碑前で「山讃譜」合唱。18時神威山荘着。

車に乗り換え1時間。浦河町野深の柏陽館へ。当初我々の案では神威山荘にもう一泊だったところ、手塚さんの提案で変更したところであつた。風呂、ビール、地元の味覚は大変な行程の後だつただけに大変助かりました。ぐつすり就寝。

7月9・10日

お陰様で予備日を使うことなく9日札幌、10日東京と無事終了しました。小野さんアドバイス、手塚さん何から何までありがとうございました。次回もよろしくお願ひします。

難された山（注1）です。針葉樹会員として一度は訪問すべき山ではないかと札幌在住の小野（昭40年卒）会員から昨年の十勝登山の折りアドバイスさせていたものです。

7日に幌尻から下山し、小野会員の北電山岳部の後輩、手塚氏の車で神威山荘に夕刻入りました。8日好天に恵まれ、午前5時半に神威山荘を出発、ニシユオマナイ川を遡行、何回かの渡渉の1時間40分後、予め得ていた情報の通り、第2二股の右岸に大塚さんのレリーフを見つけることが出来ました。4年前に日本山岳会北海道支部の有志が「レリーフを磨き液で磨き水洗いした」（注2）のことでしたら、その通り、こよなく山を愛した大塚先輩の立派なレリーフは綺麗なままでした。レリーフの周りの雑草を取り、線香を手向け、大塚先輩のご冥福を祈りました。

神威岳登山は、レリーフから更に沢を1時間半遡行、それから30度近い急斜面を800m頂上を目指す、かなり厳しいものでした。出発から山荘に戻るまで12時間半を要しました。その帰り道、大塚先輩のレリーフの前で山讚賦を捧げて、今後とも一橋山岳会を見守つて頂くようお願ひして帰りました。

登山を含めた詳細は別途会報（注3）などでお届け致しますが、今年は奇しくも大塚先輩の三十三回忌の年かと思ひますので、まず佐藤久尚（昭41年卒）、岡田（昭42年卒）、中村（昭43年卒）、宮武（昭45年卒）の会員と共に7月6日に日高の幌尻岳に登り、続いで神威岳登山を目指しました。ご存知のように神威岳は大塚武大先輩が1983年9月遭

## 神威岳山麓に 大塚武先輩の遭難碑訪問

小島 和人（昭40年卒）

（注1）大塚武氏への追悼文が『針葉樹会報』第64号に掲載されています。  
・弔辞「大塚武氏」 望月達夫  
・大塚君のこと 望月達夫  
・大塚さんを憶う 根本大  
・大塚さんとの四十六年 山田亮三



大塚武氏遭難レリーフ前にて、2016年7月8日

・「両氏の連続急逝を悼んで——最近登山

同行の印象記　久保孝一郎

(注2)当HPの『サロン』—『会員消息』に以下の記事が掲載されています。

「2012年11月13日　『(JAC) 北海道支部通信』第87号に「大塚武第5代北海道支部長遭難レリーフを訪ねて」の記事が掲載されました。」

(注3)『針葉樹会報』第137号「幌尻岳・神威岳行」　宮武幸久

## シニア会員の岳沢行

竹中　彰（昭39年卒）

岐を越え島々宿経由で帰京した。  
9月1日(木)晴  
河童橋発 12:25—岳沢小屋着 15:28 (59分)  
朝一番のスーパーあずさ1号に乗車し、定刻9:39に松本駅に着き、10:15発の上高地行き直行バス利用の為に、アルピコ交通（旧松本電鉄）のバスターミナル（BT）に向った。駅から4分ほど地点にBTが整備され、地下階にはスーパーがあり、弁当調達に便利である。上高地までの直行便は片道2450円で電車乗継2650円（個別購入）に比べて若干安く、かつ乗換の煩わしさから解放される。

12時前に上高地BTに到着し、河童橋の畔で晴れ渡つた岳沢を囲む山々をオカズに昼食を摂る。この日の橋周辺には外国人観光客の姿は殆んどなく、静かであった。橋から梓川右岸の工事用道路を進み、日本山岳会・山岳研究所（宿泊施設）前を通り越して、少し先の岳沢分岐で登山道に入る。ルート上に付された標識を⑩番から逆に辿つて、⑦風穴の冷風に体の汗を静め、⑧胸突き八丁で息を切らせつゝも、好天の下の西穂・奥穂にかけての穂高の峰々に嘗ての前期合宿で駆け回った岩の壁、尾根に懐かしさを覚える。

夏の終わりに、久し振りに上高地（岳沢）から前穂、徳本峠から霞沢岳へ行こうとの本間さんの誘いに乗つて、佐難さんと共に3人のシニアメンバー（平均78歳）が上高地に向つた。残念なことに徳本峠小屋が満杯との事だったので、3日目の宿を徳沢ロッヂに変更し、4日の行動計画が修正されることになつた。小生は早朝にロッヂを出発し、徳本

このところ、毎年5月下旬に東京多摩支部の登山教室で2年目の受講生を山岳研究所から(11)まで案内してきたが、何時も美味しそうなメインディッシュの匂いを嗅がされるばかりで、やや欲求不満が嵩じていたのでこれが解放されるとの期待感が高まる。

橋からは3時間要して小屋に入る。受付を済ませて早速、生ビールのジョッキで乾杯。台風一過後の晴天狙いで、多くの宿泊客が入っている。18時前に夕食の合団があり、20人余のキャバシティの食堂に向かう。今回本間さんと小生は各自「甘露」を合計で1L程度持参したが、翌日の前穂登頂を控えて我慢する。夕食後はテラスでアーベントロートに輝く前穂・西穂稜線、暗く沈んでいく上高地河童橋界隈を眺めて時間を潰す。食堂脇の衛星TVが明日の天気予報とカープ戦を映しているのを横目に割当ての部屋「ジャンダルム」に入り布団に横になり、スグ意識がなくなる。夜中に暑さに目が覚めたが、未だ0時前であり、トイレのついでに外に出て見ると、満天の星空で明日の晴天を確信する。

9月2日(金)晴

小屋発 5:53—紀美子平 8:52／9:00—前穂頂上 10:00／10:45—紀美子平 11:28—岳沢小屋着 13:45

早朝4時過ぎに部屋の電気がバチッと点いたので目が覚める。朝のお勤め後5時過ぎからの朝食に並び、食事を済ませる。早々に出発する他パートナーを横目に6時少し前に入山する。岳沢を横切りテントサイト脇を登つて次第に傾斜を増す登山道を進む。途中で、佐薙さん、本間さんがマイペースで登ることなので、独り先行する。途中チムニー状の岩場、ハシゴ、カモシカの立場、絶景ボイント、雷鳥広場（7合目）、クサリ場等を過ぎ晴れた空の下に「紀美子平」に到着した。既に平には老若男女多くの登山者が休み、或

いはザックをデポして前穂頂上に向つていた。多くのパートナーは頂上を踏んでから吊尾根を経由して奥穂高岳頂上、穂高岳山荘に向う様子であった。



前穂高岳頂上にて。9月2日

こちらは岳沢小屋連泊の予定であり、天気も安定しているのでユツクリと頂上を往復すればと気楽であった。佐薙さんに携帯電話を入れると（岳沢はほぼ全域圏内）、体調不良の為に小屋に戻つて昼寝することであり、また本間さんの到着も時間がかかりそうだったので、そのまま独り頂上に向うこととした。

昭文社地図では岳沢→紀美子平3時間、平→頂上30分計3・5時間とのことであったが、老骨にムチを入れつても平から頂上へは倍の1時間を要した。この点はショックであった。頂上は大昔の記憶の通り、南北に細長い大きな岩が積み重なつた安定したスペースであった。まずは3090mの一等三角点脇で若者グループに頼んでシャッターを押して貴い証拠写真を確保した。その後は360度の展望を満喫しつつ、昼食を摂る。北側の端に寄ると、北尾根2峰から数パートナーがアプザイレンで降りて来るのが目に入る。その後、パートナーに尋ねると涸沢からV・VIコル経由で登つて来たとのこと。雪も全く消えたガレ場をコルに上るのはご苦労様という感じ。学生時代の涸沢定着時には、雪渓をIII・

IVのコルに上つて北尾根経由で前穂に登った記憶がある様な、ない様な…。

槍ヶ岳から北方の後立山方面の山々の眺望も十分楽しんだ後、次第に頂上の登山者も増えて來たので、重い腰を上げて下山にかかる。 急な下りで、登りのパートナーとのすれ違いで待機することもあつたが、下りも紀美子平まで40分余を要した。一息入れた後、平を後にする。本間さんに携帯をかけると、紀美子平から下山して、上部のハシゴの下辺りを下山中とのこと。追いかけるべくスタートしたが、紀美子平直下のクサリ場で障害を持つかなり高齢の女性登山者が苦労してユツクリ登つて来るのを待機した為かなり通過に時間を要した。しかし、岩場や足元の不安定な場所の下りでは加齢によるバランスの悪さを感じ、最早この様な登山は自分には無理かもと寂しい気持ちになつた。

その後岳沢パノラマで本間さんに追い着き、周囲の岩尾根と下部の草付の緑のコントラストなどを眺めながら10分ほど休憩し、その後は再び、クサリ、ハシゴ場等を経由して下り、13:45には佐薙さんが待つ岳沢小屋前に帰還した。本間さんはその後30分余で無事に戻つた。全員揃つた所で持参の「甘露」、ツマミを前に真昼の饗宴を開始し、昨年3月に急逝された高崎（治）さんの高崎酒造がらみ

の懐旧談で盛り上がった。夕食後は特にすることもなく、明日は徳沢へ下り、パノラマコース分岐（中畠新道）で平川さんの遭難碑を捜すだけなのだが、今日のアルバイトで疲労も蓄積していた所為か、布団に横になつた途端に眠りに落ちた。

○月3日（土）晴  
小屋発 6:10—風穴 7:15—岳沢入口 8:05—明神池 9:35—徳沢ロッヂ 10:42—11:45—パノラマ分岐 13:20—14:20—新村橋 15:03—徳沢ロッヂ 15:30

早朝から前穂（奥穂高岳）を目指す多くの登山者が出发した後、上高地への道を下つた。途中風穴でワンストップしたが、土曜日の所為か下からはかなり多くのパーティーが登つて來た。中でもテントを担いだ若い女性だけのパーティーが目立つたが、岳沢日帰りの予定か、かなり軽装の若者パーティーもいた。

順調に岳沢入口に着き、小休止の後に梓川右岸の遊歩道を明神池を目指して進む。5月に來た時には上高地と北海道のみに生育するケショウヤナギが雪の様に雄花（？）を降らせていたが、今は青々と葉を繁らせていた。明神池手前の流れ出る展望場所で暫らく明神岳の連なりを見ていると、池にはカモ（佐羅説ではオシドリのメス）がエサを漁りながら遊

弋していた。その後久し振りに穂高神社に拝観料を払つて神域明神池を見学する。残念ながら期待したオシドリは見当たらなかつた。

明神橋を渡つて左岸に移り、明神館前で上高地から潤沢、槍沢に向うメインストリートに出ると人通りが絶えず、賑わつていて。ソフトクリーム400円也を舐めて元気を付けて徳沢への道を進む。5分程度で徳本峠への道を右に分け、ひたすら徳沢を目指す。10:42に徳沢ロッヂ前に到着し、後続の佐羅、本間さんを待つ。全員揃つた所で昼食を済ませ、

不要な荷物をロッヂにデポして新村橋を目指す。徳沢園を出たところで、関西弁の姦しい男女混合パーティーがいたので、追い抜くと共に早めに梓川に出た。更に右岸の作業道に出ようとしたが、かなり奥に取り付けており、時間距離をロスするので、河原伝いに新村橋に向つた。

橋から治山道に出て暫らく行くと「北ア山小屋交友会」のプレートを付けた数台の車が駐車している。ここから奥又白谷の砂防堰堤作業用の道に左折し、登りが始まる（12:23）。その後次第に傾斜が強まり、左右に点在する苔むした遭難慰靈碑を横目に2ピッチ進み、灌木帯を抜けてパノラマコースとの分岐に到着した（13:20）。中畠新道への道は灌木、ブッシュに覆われて確認し難かつたが、微かな赤

ベンキに導かれて踏み跡を辿つて松高ルンゼ入口に到着した。右手の岩壁を窺うと、3.5mの高さに緑がかつたプレート様のものが設置されており、佐羅さんの双眼鏡で見ると鳥の羽のようなデザインが確認出来るとのことで接近して確認した。結果的には熊本登高会の遭難碑（昭和52年5月）であった。その後色々周辺を捜したが、それらしいものは発見できず、已む無くガレ場上で佐羅さんと山讚賦1番を唄つて慰靈した。

下の分岐の大岩で待つていた本間さんに合流すると、周辺を小動物がウロチョロしているとのことで、よく見るとオコジョが岩の隙間を走り回つていた。余り人を恐れる様子もなく、可愛らしい顔を覗かせていた。

下りは40分余で一気に新村橋に戻り、左岸に渡つて小休止。玄関先にハルニレの巨木が繁るロッヂまでは20分程度の歩きで到着。

チエツクイン後2段ベッドが4台入つた相部屋に荷物を置き、すぐ風呂場に向う。今年4月に耐震補強工事を機に館内全面改装したところ、2011年8月に新入部員を連れて蝶ヶ岳に向つた際に宿泊した時の雰囲気は全く残つておらず、快適、近代的なロッヂに生まれ変わつていて。嘗ては、徳沢の村営小屋の名であったが、合併で松本市に吸収された結果、現在は松本市山岳観光課が運営して

いる（他に上高地アルペンホテル、上高地食堂、焼岳小屋がある）。

風呂場も大きな浴槽、10カ所程度洗い場でユツクリ入浴できた。

浴後は1階のラウンジで早速生ビールで乾杯し、夕食まで待機する。夕食は岩魚の塩焼き、豚の冷シャブ、煮物、デザートと300ml×2本の冷酒の肴として適量であった。小生は翌朝早立ちを予定していたので、本間さんが交渉して朝食弁当にしてもらつたが、食後に手渡された。また、お湯も食堂カウンター脇の給湯器からテルモスに詰めた。食後暫しラウンジに戻つて「甘露」を飲み干し、追加のアルコールなどを嗜みつつ歓談する。8時過ぎには部屋に戻つて横になる。

○田4日(田)晴  
ロッヂ発 5:30 — 徳本峠分岐 6:03 — (3p) — 峠 (8:05~8:30) — 力水 (8:55) — 岩魚留小屋 (9:57) — (3p) — 一俣 (12:20) — 徳本峠入口 (13:45)

朝4時起床を予定したが、この数日の行動の疲労からか、1時間遅れて目覚め、慌しく準備して5時半にロッヂをスタートした。精神に向う道に殆んど人影はなく、偶に単独行者やランナーと擦れ違う程度。ほぼ30分で徳本峠分岐に着き、ベンチで腹<sup>3</sup>しらえする。

弁当の内容は予想以上に豪華で、昆布や細かく刻んだ野菜等を炊き込み2枚の箸の葉で包んだ飯と、やや小振りのちまき風の飯にキザミ生姜と豚肉の佃煮、タクアンがおかずとして添えられていた。その他に200cc紙パック入りお茶とブルーベリー味ソイジョイ1個が袋に入っていた。食事中に男女各1人の単独行者が峠に向つて行つた。

峠への道にはトリカブト、サラシナショウマ等の花に加えてナナカマドやオオカメノキの赤い実等も目に付いた。次第に傾斜を増す中、時々水場やベンチで小休止しながら分岐から3ピッチで峠に到着した。峠に近づくに連れて次第に明神、前穂方面の視界が開け、写真撮影にも足を止める。頂上には数張りのテントがあつたが、何れも撤収にかかるついた。峠の標柱にカメラを置きセルフタイマーで西穂・明神岳をバックに自撮り、何本もの大きな突っ支い棒が目立つ旧小屋の横で2回目の朝食を腹に納めたら遙かな島々宿目指して出発する (8:30)。

10分ほど前に5、6人の男女パーティーが岩魚留方面に峠を下つて行つた。これを追いかける形で急なジグザグ道を下る。25分程度でジグザグを一下りした「ちから水」で先行したパーティーが休んでいたので当方も水を補給がてら少憩。その後は先行パーティーを追

い越しながら島々谷南沢に沿つて下り、部分的に高捲きや稍々踏み跡の薄い所もあるが、問題なく通過する。

「ちから水」からは1時間弱で岩魚留小屋に到着する。老朽化、無人の小屋の縁側で一息入れていると下から男女ペアが登つて来た。この日、下からのパーティーとスレ違つたのはこの一組のみ。10分ほど休んでいると、後続隊が下つて來たので腰を上げる。その後は谷の岩壁下に設置された棧道、橋を進み、所々右手の沢の土砂が押出している箇所、狭



徳本峠から明神と前穂

い道などを踏みながら二俣への中間点（2.6 km地点）のベンチまでノンストップで進む。雨天時等天候次第では難易度も上りそうなるトートであった。ベンチで15分ほど軽食を補給して、二俣を目指す。暫らく進んだ所で後ろから60～70L位のザックを背負つた若い単独行者が追い着いて来たので道を譲る。その後二俣で再度合流して聞いたところ、自然環境等をテーマに研究中の信州大の学生で、夏休みにクラシックルートを歩いているとのこと。

その後は地図にある、炭焼き窯跡、戻り橋、行き橋、飛驒城主三木秀綱奥受難碑（折口信夫の追悼詩）、奇怪樹形（あがりこサワラ）を経て二俣に着く（12:20）。ここにも「戦国落人悲話」として、先の秀綱奥方の悲話と折口信夫（釈迦空）の歌碑が設置されていた。折口が昭和元年に上高地入りの途次この地を通り、歌を詠んでいる（「をとめ子の心さびしも清き瀬に 身は流れつゝ人恋ひにけむ」）。大正から昭和の始めに、多くの文人墨客がこの地を通つて上高地入りした一例。

島々谷北沢と合流した二俣からは島々谷川に沿つて林道を下る。この頃には少し雲も広がつて來たので、強烈な陽射しも遮られていったが、砂防ダムや発電所を過ぎ、車も通る單調な6km余の道に飽き飽きする頃最後（下流

からは最初の）のシッカリしたゲートに着き、駐車場には5、6台のクルマが駐車していた。

そこからは人里の匂いが強くなり、川沿いの道を10分ほど進むと徳本峠入口の大きな看板に着いた。すぐそばにアルピコ交通のバス停があつたが、表示がテープで隠されたような気配があり、廃止された様子であるが代りのバス停の案内がない。近くに交番があるが、日曜日で閉まっている。入口の転送電話で問合せるが、電話口の警官も移転先は分からぬとのこと。辺りに人気もなく途方に暮れる。已む無く周辺を歩き、漸く国道（沢渡→新島々）にバス停の表示を見つけ、14:16のバスがあることを見つけて一安心。それにしてもアルピコは不親切だと強く思う。折角島々に辿り着いて気分良くしているのに、一瞬でも不安な気持ちにさせるのはブチ壊し。

携帯電話の電池も無くなり、公衆電話も見当たらないので尚更であつた。

ほぼ定刻に新島々行きのバスが到着し、先頭座席の外人さんの間の補助椅子に座らされて駅に到着した（@280円）。ヤレヤレ。松本行き電車は20分後の14:45に発車するので、その間にシャツを着替え、冷えたコーヒーを飲んで改札の行列に並ぶ。日曜日ということで、下山客で混み合うかと思つて徳本峠の下りもし急いだ感があるが、未だ時間が早

い所為かそれ程でもなく、松本駅での接続もスグあずさ24号が発車するのに飛び乗つたが、自由席は十分な余裕があり、茅野辺りまでは2人掛け席を独りで座つていた。順調に八王子経由成瀬駅に戻り、今夏の夏山は無事に終了した。

\*今回の計画並びに実施に當つては、本間さんに計画策定、宿の予約等仕切つて頂き、当方は若干のアルコールを持参して計画に乗つていくだけで済むという大変樂な山行でした。勿論実際の登山では、自分自身の体力に半信半疑であつたが、何とか前穂登頂計画を遂行できたこと、逆コースとはいえ初めての徳本峠越え（大学2年次の夏合宿涸沢入りに際しては、本隊の徳本峠越えの前に先発隊として米等食料調達、ボンベボンカ等の為バスで上高地入りした）を何とかこなして、無事に島々宿に着くことが出来たことなどはある面自信にはなつた。夏の終りとはいえ、岳沢全体に全く雪が無く、学生時代の前期合宿で雪渓などを自由自在に登降した経験からすれば、物足らない面はあつたが、後期高齢者入り目前で久し振りの穂高の峰を踏んだことは十分満足できるものだつた。佐薙さん、本間さん有難うございました。

## 岳沢行

本間 浩（昭40年卒）

9月2日（金）前穂高岳

今日は三月会で話題になつた重太郎新道を登る。クサリとハシゴを使う何と云うこともない平凡な路なのか、それともオツカナイ難路か？

6時チョット前に岳沢小屋を発つたが、しばらくすると竹中さんのピッチには付いて行けないことが判り、各自ペースでることにする。岩の間を擦り抜け最初の梯子の手前で一休みする。これから支尾根の稜線まで岩場とハシゴが続く。ハシゴは兎に角、岩場は最近登り慣れないせいか結構ショッパイ。昔習った三点支持で慎重に登るが、帰りここを降るのは怖いと心底思う。しばらく行くと「下りは別ルート」の案内板があり、ホントする。支尾根からは急だがそれ程難しくはない、しかし下の岳沢を見ると急な尾根であることがよく分かる。

紀美子平手前のクサリ場、地図には濡れる

30分位休み、小生もと思いザックをおいて立ち上がるがすぐ脚が攣り本格的に攣つたようなので前穂はあきらめる。時間的には12時前なのでまだ余裕があり、このまましばらく休み、登る手もあつたが、あの降りで再発してはと思い断念した。山頂でバンザイ三唱する歳でもなし、ここまで来れば充分々々、タバコも美味しく満足々々。紀美子平（2800m 10:10～11:15）。

下りでは「岳沢パノラマ」で頂上に行つた竹中さんに抜かれ、その後も多くの下山者に道を譲り、2時半頃岳沢小屋に戻つた。



河童橋上で。左から本間、佐薙。2016年9月1日

9月3日（土）

岳沢を下り、平川氏の遭難碑を探しに奥又白の中畠新道分岐に向かつたが、小生遅れてしまい、着いた時には御二方（佐薙さん竹中さん）は遭難碑を探しに出掛けている。その内一匹のオコジョが前の岩陰から顔を出し目と目が合う。ウマが合つたか岩陰、木の下と場所を変え顔を出し、御二方が戻つてもまだ離れなかつた。元々人懐っこい動物なのか？ 屏風のコルから下るパーティーは10組以上いたから人間が珍しかつたとも思えないので。今回山行で出会つた唯一の動物也。

## 9月4日(日) 徳本峠往復

今日は竹中さんが初めての徳本越え・下山の日で朝早く出かけた。残る我々二人は、降水確率70%の予想のもと、どこに行くかを検討。蝶か、徳本か。雨を考えると蝶は長嶋山までだろう、しかしここは木立の中で山の景色は見えない、やはり徳本峠か、天気が持てば明神・穂高が見えるかも、と云う佐薙さんの考へで徳本峠往復に決まった。

峠まで緩やかな登りだが思つた以上に長く、着いた時にはそれなりにホツとした。苦



河童橋上で。左から佐薙、竹中。9月1日

労は報われ、天気は上々、明神・穂高を充分堪能、蝶から縦走してきた妙齢のお嬢さんともお話をでき実に充実した1時間をすごせた。しかも徳沢ロッジに着いて玄関先で一服していたら雨が降り出すという、ツキについて結構な一日でした。

## 9月5日(月) 下山

### あとがき

1、お薦めの宿泊と食事の店

#### 徳沢ロッジ

今年4月改装で外観・内部・宿泊スペース・お風呂・食事等全て満足レベル。特に1泊2食1万円の相部屋は、2段ベッド定員8名で足元、頭部分に机状のスペースがあり、便利。15,000円位の個室(2~4名)もあり、利用者は登山者と観光が半々くらいか。

#### 松本の蕎麦屋「?」

松本駅ビル4階にあり、唯一「馬刺し」をだすそば屋。牛スジ煮込み、ゴボウ天もイイ感覚になる。蕎麦屋と云うより食堂という感じの店で、値段も手頃で昼時であり混み合っている。「蕎麦」も多分美味しいことと思う。(編集部注 「いいだや」でしょう)

## 2、来年の計画 「グルリ屏風岩」

佐薙さん主唱の「涸沢から屏風のコルを経て徳沢へ下る」プラン。ある面今年のリベンジでもあるが、涸沢を中心に穂高を考えると昔懐かしい「涸沢合宿」にもなる、融通無碍の計画。1年間の時間を掛けて、平川氏の遭難碑・徳本越え等に個々人の希望を加味しプランを詰めていくのもシニアの楽しみ?

## ミヤマキリシマの九重連山

中村 雅明 (昭43年卒)

梅雨の最盛期の6月中旬に坊ガツルの法華院温泉に連泊し、九重連山のミヤマキリシマを満喫しました。メンバーは私共夫婦と家内の妹さん3人です。九重山域は1971年4月に新婚旅行で訪れて以来45年振りです。その時は由布院温泉で一泊し由布岳を登った翌日、「やまなみハイウェイ」長者原でバスを降り、諫峨守越コースから坊がつるに入り法華院温泉に泊まり、翌日大船山に登り竹田市になりました。今回は懐旧の山旅でもあります

たが、覚えていいことは法華信温泉のたたずまい、大船山に登る途中から見下ろした坊ガツル（まだ枯野）、大船山の頂上心しき風景など断片的なものです。

梅雨時にも関わらず九重連山に向かつたのは、九重山群を象徴するミヤマキリシマです。5月下旬から山麓から開花したミヤマキリシマは、だんだん山頂に向かつて開花を進め、6月中旬ごろに山頂付近が見頃になります。

特に平治岳は山頂一体がミヤマキリシマの群落で埋め尽くされピンクの絨毯に圧倒されるとのことです。

4月14～16日に発生した熊本地震に先立つ3月中旬には、飛行機、法華院温泉、ホテルの予約を済ませました。地震の影響が心配でしたが、出発の10日前に宿舎に電話して、余震、建物、道路の状況を確認した所、大丈夫と判断して予定通り出発することにしました。出発前に気になつたのは、ミヤマキリシマの盛りが過ぎてしまつたのでは？ 梅雨時なので連日雨の中を歩くのでは？ です。

結果的には奇跡的な好天の下、満開のミヤマキリシマを楽しみながら九重連山を楽しむことが出来ました。

## 行程

6月13日 羽田(12:10) ⇒ 大分空港(13:45)

～14:00) = 由布院駅前バスセンター

(14:50～15:00) = 由布院温泉花の庄

(15:30)

6月14日 花の庄 (8:30) ⇒ 由布院駅前バ

スセンター (8:40～9:00) ⇒ 長者原くじゅう登山口 (9:52～10:05) — 2pで雨ヶ池

越(11:50～12:09) — 坊ガツル(12:30～58)

— キャンプ場 (13:15～20) — 法華院温泉

山荘 (13:35)

6月15日 法華院温泉山荘 (7:40) — 2p

で大戸越(8:42～50) — 平治岳(9:27～50)

— 大戸越 (10:13～25) — 2pで北大船岳

手前 (11:33～52) — 北大船岳 (12:55) —

段原 (12:00～08) — 大船山 (12:27～40)

— 段原 (13:00～09) — 2pで大船登山口

(14:12) — 法華院温泉山荘 (14:35)

6月16日 法華院温泉山荘 (7:55) — 錐立

峠 (8:25～31) — 2pで白口岳 (9:55～

10:02) — 中岳 (10:51～11:00) — 九住分

れ避難小屋 (11:36～58) — 3pで牧ノ戸

峠登山口 (13:35～40) — 牧ノ戸温泉九重

観光ホテル (14:30)

6月17日 九重観光ホテル (10:00) = 長者

原 (10:05～20) = 由布院駅 (11:00～15:10)

⇒ 大分空港(16:05～16:55) = 羽田(18:30)

6月13日(月) 雨後晴れ

出発の前日からそれまで南に下がっていた

梅雨前線が北上に日本列島に停滞し、九州か

ら大雨になりました。夜半から関東も雨が強

くなり始めました。明け方少し小降りになり

ましたが相当に濡れる雨です。9時過ぎにい

よいよ梅雨本格化と暗い気持で駅に向かいま

した。12:10 羽田を発つた時も雨が止みませ

んでしたが、大阪付近で上空が明るくなりま

した。13:45 に大分空港に着くとすっかり晴

れ上がりついたので思わず好天に喜びました。

発車間際の空港バスに乗つて由布院へ。約

1時間で由布院駅バスセンターへ到着。駅近

くの由布院温泉花の庄というホテルに 15:30

に入りました。地震の影響で大きなホテルな

のに宿泊客は10人位で大浴場は貸切り状態。

のんびり過ごせました。

6月14日(火) 晴れ

今日も晴天です。9:00 発の九州横断バスで

由布院を後にして「やまなみハイウェイ」を

50分ほど走つて「長者原くじゅう登山口」に

着きました。バスを降りたのは自分達だけで

す。駐車場には自家用車が沢山停まつてゐる

ので、車で来る人が多いのでしよう。

長者原駐車場脇のタデ原湿原入口には「坊がつの讃歌の碑」があります。「坊がつの讃歌」は広島高等師範学校山岳部の「山男の歌」を

アレンジしたもので、昭和53年にNHKみんなの歌で芹洋子が歌つて九重山群が人々に広く知られるようになりました。

タデ原湿原を横切つて雨ヶ池越に向かいました。このコースは九州自然歩道なので良く整備されています。樹林の中の道で初夏の強い日差しが遮られます。かなりの登りですが左右の木々には樹木名のプレートが沢山あります。楽しく歩けます。清楚な白い花が綺麗なコガクウツギ（小額空木）が道の両側にあります。また、オオヤマレンゲの大きな白い花も見事でした。2Pで樹林が切れ展望が開けたベンチに着き小憩しました。ここからは平坦な草原になり木道を進むと雨ヶ越です。雨が降ると水が溜り池になりますが今は草原状態です。前方奥には平治岳、大船山が見え頂上付近はピンクに染まっています。

ここに来る前に見たミヤマキリシマは盛りを過ぎていたので1週間遅かったかと思いましてが稜線から頂上付近は十分楽しめそうと安心しました。木道に腰かけて昼食後、雨ヶ池越のピークまで一登りした後は坊ガツルまでの樹林帯を下り坊ガツルに12:30に到着しました。北面以外は三方を山に囲まれ、緑豊かな草原が伸びやかに広がっています。明日以降に巡る予定の平治岳から北大船山、大船山に連なるピンクに染まる稜線、その右に立

中山～鉢立峠～白口岳の稜線が続いています。南奥にある法華院温泉山荘に向かう前に坊ガツルキャンプ場に立ち寄りました。草原の廻りにトイレ、炊事場、避難小屋があり快適にキャンプできそうです。キャンプ場の水は九州最大の河川築後川の源流です。『坊がつる讃歌』の4番「四面山なる坊がつる 夏はキャンプの火を囲み 夜空を仰ぐ坊がつる 無我を悟るはこの時ぞ」が思い浮かびます。キャンプ場を後にして法華院温泉山荘に向かいました。

14:35 山荘着。九州で最も高い場所（1303m）にある温泉宿です。6畳の個室に入りました。ミヤマキリシマの最盛期は22有る個室が満室になり120畳敷の大部屋に一人一畳の割り当てになるそうです。風呂は白濁の硫黄泉の掛け流し、熱めの良い湯で疲れが取れました。18:00から夕食。山小屋とは思えない品数、ボリュームに大満足しました。明日は今回のハイライト、平治岳、北大船山、大船山の3座を巡りミヤマキリシマを堪能する予定なので早めに就寝しました。

6月15日(水) 晴れ

朝から梅雨時には珍しい快晴。今日は平治岳～北大船山～大船山を1日かけて巡ります。6:45朝食後、身支度を整え、法華院温泉を7:40に出発。坊ガツル草原をキャンプ場に

進みました。キャンプ場の先が右に大船山、左に平治岳の分岐になっています。左側の樹林帯に入つてゆるやかに登るとだんだん黒土のドロンコ道になりました。一石運動に協力して両手に石を持って登り石置き場に積みました。沢沿いの急な登りをしばらくすると急に視界が開け、8:42大戸越に着きました。出発してから1時間。比較的楽な登りでした。

大戸越周辺のミヤマキリシマは盛りを過ぎていましたが、平治岳南峰にかけてはピンクに染まっています。南峰へは2本のルートがあり、花の時期は登りと下り専用の一方通行となっています。ミヤマキリシマ満開の時期の休日には、この一方通行の道も登山者で溢れ大渋滞を引き起こすのですが、今日は先行者2人がいるのみです。頂上の近くになると花のトンネルです。南峰に着くとさらには素晴らしい景色が待っていました。南峰を少し下つた先にピンクの絨毯を敷き詰めた平治岳本峰が控えていました。南峰からゆるやかに右側にルートを取つて登つて9:27平治岳本峰（1640m）に着きました。頂上に向かう道は満開のミヤマキリシマに雜じつてドウダンツツジの花も目立ちました。濃紅色のツクシドウダン（筑紫灯台）、ピンクのベニドウダン（紅灯台）、白色のシロドウダン（白灯台）の3種類を楽しみました。頂上からの

展望も見事です。頂上付近のミヤマキリシマ越しに三つのピークの三俣山、その左に硫黄山、星生山、天狗ヶ城、中岳、稻星山…九重連山が連なります。北東遠くに双耳峰の由布岳が望めます。

大戸越に戻つて小憩後、北大船岳に向かいました。ウツギなどの樹林帯を40分登ると見晴しが良くなり北大船山に向かつて緩やかな道が続きます。道の両側がミヤマキリシマ満開の素晴らしい稜線です。振り返ると先ほど登つた平治岳の山腹から頂上一体が鮮やかなピンク色に染まっています。北大船岳の手前で見渡す限りのミヤマキリシマを堪能しながらの昼食は格別です。

北大船山を越えた先で下つた鞍部は段原です。段原は「坊がつる讃歌」の3番「ミヤマキリシマ咲き誇る 山はピンクに大船の 段原彷徨う山男 花の情も知る者ぞ」に読み込まれています。段原で小憩後、米窪の縁沿いに登り、最後の急坂を越えて12:27北大船山頂(1786.2m)に着きました。この頂上には45年前に登つていますが、かすかに残る記憶の頂上は樹林に囲まれた狭いもので目の前の開けた頂上は全く違つていました。残念ながら登る途中でガスが出て眺望はありません。晴れていれば九重山群西部の山々、祖母傾山群、阿蘇五岳などが望めたでしょう。

自分達より先に着いた若者3人組は竹田市久住側に下つて行きました。12:40に頂上を後にして段原に戻りました。そこからリョウブやミズナラなどに樹林帯1時間強の下りで14:15坊ガツルキャンプ場に着きました。

#### 6月16日(木) 雨のち曇り

梅雨の最中なのでやはり好天が続きません。6時に起床して空を見ると今にも雨が降つときそうです。何とか午前中はもつて欲しいと祈りましたが、6:45からの朝食を終えて出発準備をしていると大粒の雨が降つてき



平治岳手前から坊ガツル、背後は九重連山。6月15日

ましたが。雨具上下、スパツツの完全雨支度で7:55に法華院温泉を出発しましたが、思いがけず殆ど雨が降つていません。空も明るくなつてるので意を強くしました。山荘から少し歩くと池ノ小屋への登山道の入り口がありますが「崩落の為登山禁止」の看板があるので当初と予定を変えて鉢立峠に向かいました。緩い登り30分で鉢立峠着。ここから白岳まではかなり急な登りです。しかも滑りやすい斜面の道です。2p1時間半で9:55白岳着。



北大船山頂上。6月15日

頂上に着く少し前から雨が降り始めだんだん強くなりました。正面にこれから向かう九州本土最高峰の中岳でガス越しに見えます。頂上にかけてミヤマキリシマが点在して咲いて綺麗です。白口岳から稜線を下り、稻星山腹をトラバースして十字路コルに出ました。コルから一登りで中岳頂上へ。鎖場もある急な登りですがミヤマキリシマに慰められました。晴れていれば360度の大展望、北から三俣山、左廻りに扇ヶ鼻、久住山、大船山の九重連山が楽しめたのですがガスの中の頂上で残念でした。雨やまず寒いので、天狗ヶ城を越えて久住分かれを経由して久住分かれ避難小屋に下りました。道々のかしこにミヤマキリシマが咲き乱れていました。避難小屋は石室で板敷がない殺風景な造りでとても泊まれるものではありません。久住山域の避難小屋は皆同じ造りのようです。それでも雨がしげるのは助かります。昼食を摂り12:00出発。

避難小屋から岩の間を星生崎脇まで登りきると、西千里浜の平らな広い砂道が続きました。雨も殆ど止みました。沓掛山（1503m）までは緩やかな尾根下りです。晴れていれば気持ち良いでしょう。沓掛山から急な下りになりました。第一展望所に13:22着。又雨が強くなりましたが、そこから舗装道路を下つて牧ノ戸峠登山口に13:35着。標高13

30mの牧ノ戸峠は「やまなみハイウェイ」の最高所で久住山へは最短時間で到達できるので、天気が良ければ多くの登山者で賑わう所です。峠から長者原へ下る遊歩道を1時間歩いて牧ノ戸温泉・九重観光ホテルに14:30に着きました。避難小屋から3時間、比較的楽な下山でした。九重観光ホテルは大きな老舗ホテルですが、地震の痛手から回復せず、宿泊者は自分達3人だけで申し訳ないほど寛げました。風呂良し、食事良しで山の疲れを十分に癒しました。

## 6月17日(金) 雨

今日は、長者原11:37分の九州横断バスで由布院駅に出て、由布院で観光した後大分空港に移動し16:55発の飛行機で帰京する予定でした。それに合わせて10:00にホテルの車で長者原に送つてもらいました。ところが、バス停の時刻表に11:37は載つていません。売店で確認したところ、地震の影響で間引きされ1日1本、16:20の便のみであることが判明しました。山行前にホテルに確認しバスは支障なく運行しているとの話で安心してしまったのです。バス会社に直接確認すべきであつたと反省しました。

止む無くタクシーで由布院に向かうことにあつたと反省しました。タクシー会社に電話したところ、幸い近くにいたタクシーがあり5分後に出発

## 会務報告

### 針葉樹会年次総会議事録

(2016年7月12日)

日 時：2016年7月12日（火）  
18:30～21:00  
場 所：如水会館14階 記念室  
出席者：中村（保）、上原、丸山（S33）、永井（S36）、三井（S37）、高橋（S38）、竹中（S39）、小島（S40）、佐藤（力）（S40）、池知、高崎（俊）、佐藤（久）（S41）、岡田、吉沢（S42）、中村（S43）、宮武（S45）、西牟田（S47）、井草（S48）、前神（S51）、藤本（S51）、兵藤（S52）、

することが出来ました。50分で由布院駅に到着しました。まだ11:10、当初の予定より早く着いたので空港に向うまでたっぷり時間がるので、駅から金鱗湖までの通りをゆっくり散歩し、金鱗湖で食事。帰りは静かな友の川沿いの道を散策し由布院駅に戻りました。当初予定した九住山は逃しましたが、平治岳、大船山、中岳など九重連山の重鎮に登りミヤマキリシマを存分に堪能した充実した山行でした。

佐藤（周）（S5）、中西（S56）、小宮山

（H26）、以上23名

（学生）上部長以下8名

## 議事

### 1 事務報告

会員総数152名（内、特別会員3名）、正会員数149名

出席会員23名、委任状提出会員61名。出席会員合計84名。

「会員の1／3以上の出席（50名）を要する」総会成立条件を満たす。

### 2 主な討議内容

1) 幹事会において決定・上程された平成27年度活動報告、平成28年度活動計画等の全議案は、全会一致で承認された。

また当日、上原相談役から提案された動議

「御嶽山行方不明者捜索活動への寄付」（一般会計から5万円）も全会一致で承認され

た。

2) 会長挨拶の中で提議された課題

\* 総会・新年会その他の行事に参加される人数の減少・高齢化をくい止めたい。

\* 学生の新入部員6名を加えて、総部員数は29名になった。

\* 学生の活動支援を継続・強化するために会

の財政再建が望まれる。

現行の会費規定は定額会費（5千円）と贊助会費との2本立。山岳部の活動を財政的、人的に如何に支援するか、引き続き論議したい。

### ＊ 中村（保）会員の「ヒマラヤの東 山岳地図帳」が日本山岳会110周年記念事業として刊行された。今後、Japanese Alpine Newsに代わって「Asian Alpine e-News」を定期的に刊行される。

\* 今年から「山の日」の休日が施行される。

（8月11日、木曜日）

\* 10年間努めた会長を退く、この間の会員からの支援、協力に感謝する。後進に道を譲り、若返りを図る。

\* 毎月の三月会も、参加者の漸減傾向で、首都圏におられる会員の参加が望まれる。

### 3 新役員体制

会長：小島和人（S40）、副会長：前神直樹（S51）、相談役：中村（保）（S33）、竹中（S39）

退任：石原（S30、相談役）、上原（S33、相談役）

新任幹事：兵藤（S52、山行）、

退任幹事：本間（S40、山行）、斎藤（S42、図書）

4) 新会長・新副会長からの就任挨拶・決意

表明

\* 「山好きの会」らしい活動を推し進めたい。

学生の活動支援を強化したい。

会員間の交流を深めたい。幹事会を活発化させたい。

### 5) 学生の活動支援

\* 引き続き、共同装備・個人装備の拡充が急務である。会員の持っている装備で、使つていない物を寄贈しよう。（送り先：一橋大学 学務部学生支援課気付 山岳部宛て）

## 平成28年度針葉樹会総会挨拶

会長 竹中 彰

本日はお暑い中、針葉樹会総会にて出席頂き有り難うございます。

小生の会長職もこの総会で2006年に就任以来10年目となります。この数年、機会ある毎に会長職を辞することについて、お願いして参りましたが、今回漸く会員の中から小島さんが助けようとの英断を下して頂き、この後の議案に上程しておりますので、宜しくご審議いただきたいと存じます。

最近は御多分に漏れず、会員の出席が芳しくなく、本日はこれまで以上に低調で20名余に止まっています。結果的に会費収入の制

約から現役の諸君には登録部員 29 名の内参加者を 8 名に制限せざるを得ない事態にも直面しています。今後も何とか会員の参加率を高めていきたい、特に昭和 50 年代半ば以降卒業の会員を、と考えておりますので、是非ご同期、前後の会員に声掛けをお願い致します。この 1 年間の針葉樹会を巡る動きについて簡単に振り返ります。

先ず、① 4 年前の創部 90 周年を機に幾つかの記念事業が実施されました。が、その内の公募学生との富士登山を契機に一橋山岳部入部希望者が増え、この春の新入生勧誘でも多くの部員が誕生するという嬉しい報告を頂きました。規模の拡大したこの一橋山岳部の活動を財政的、人的に如何に支援するかの新たな悩みも出てきた訳ですが、昨年辺りからは山岳部独自に組織的な運営も軌道に乗りつつあると伺つており、先行きに大きな期待も持てますので、引続き会員の皆さんの大いなるご支援、ご協力を得たいと考えております。

今後はこの部員諸君に自然の中で登山の楽しさ、厳しさを感じながら、パーティーディー登山の基礎知識、技術を習得し、経験を蓄積して安全に山岳部生活を送つて貰いたいと考えております。

② 昨年の総会後この 1 年の針葉樹会員の活躍については、中村保会員が韓国、中国に招

かれて講演を重ね、最近 5 月には四川・雲南に脚を向けられ、大きな成果を挙げられたこと、この間年明け早々には皆さんご承知の通り、「ヒマラヤの東 山岳地図帳」を日本山岳会 110 周年記念出版として上梓され、多くの会員にもお求め頂きました。この書については、中村先輩の永年に亘る踏査と研究の成果が盛り込まれた大変アカデミックな書として国内外でも大きな反響、評価を得て、販売も好調と伺っております。

その他国内での会員の登山も北ア、南ア、上信越などの山域で活発に行われました。これ等の山行の多くには現役の諸君も参加して山に馴れて頂くと共に O.B.との懇親も深めて頂きましたが、この間事故なく過ごして来たことはご同慶の至りであります。

なお、中村保会員は日本から海外への情報発信として、日本山岳会 100 周年の 2001 年から単独で編集されてきた英文誌「Japanese Alpine News」を発刊して来られましたが、諸般の事情から昨年の 16 号で紙ペースの刊行を停止され、今後は独自の視点からの「Asian Alpine E-News」を発信されることになり、その第 1 号も海外中心に大きな期待を持って迎えられました。引続き内外の期待に応えて頂くことを願つております。

また、毎回申し上げておりますが、山行以

外でも毎月定例の三月会も、最近は常連の参加も少し落ち込み気味なのが気になりますが、今後とも何とか首都圏におられる多くの会員の参加が望まれる所です。

③ その他、冒頭にも申し上げましたが、会長以下の役員、幹事人事についてもかなり長い間留任、留任で来ていましたが、この総会でかなりの変化が見られることがあります。特に今回相談役を退任されます石原さんは、これまで会長、評議員、相談役としてこの会を引張つて来られましたが、今回再任辞退のお申出を頂きましたのでご意向を尊重させて頂きました。また、上原さんからも今回相談役再任辞退のお申出を頂きました。上原さんは芦安の針葉樹文庫に始まる芦安との切つけを作つて頂き、その後の夜叉神峠周辺の登山道整備事業に繋がつて参りました。お二人のこれまでの針葉樹会への多大のご貢献に対しまして会員一同と共に心から感謝申し上げたいと存じます。

新任役員には気鋭の若手の起用等も検討致しましたが、未だ現役で会社勤めのため暫らくの猶予期間が必要とのことでした。会長には 40 年卒の小島さんにお願い致しましたが、小島さんはこれまで副会長として支えて頂き、また芦安の登山道整備事業に積極的に関わつて頂いています。引続きご苦労ですが、

宜しくお願ひ致したいと思います。また、相談役2名の退任の補充には、中村保会員に就任をお願いしたところ、ご快諾頂きました。ご多忙の中ですが、色々と大所高所からのご助言を頂きたいと存じます。

④会の財政事情に関して一言申し上げますが、先程ご説明した現役部員の増加に伴う支援の必要等から是非これ等の事情について改めてご理解を頂きたいと存じますが、この数年京都の市川会員から多額のご寄付（賛助会費）を頂いておりますことに改めて感謝申し上げたいと思います。

⑤なお、以前からご紹介しております「山の日」がいよいよ今年の8月11日から実施されます。小生が関係しています、日本山岳会でも高尾山での親子登山キャンペーンや奥多摩町でのイベント等を企画しています。是非皆さんのお孫さん等と一緒に奥多摩、高尾山等を歩かれては如何でしょうか。

⑥なお、学生さんにも折角日本山岳会の団体会員になつてているのですから、部員の担当を決めて、四谷のルーム、学生部をもつと利用して、他校との情報交換、交流を図つては如何かと思います。山岳会では毎年夏に各國持ち回りで日中韓三国学生交流登山を行なつており、本年は日本が当番です。その気になれば参加の道はあると思いますので、情報を

取つて是非検討頂きたいと思います。なお、この総会で小生もお役御免となります。この10年間色々と会の活動にご支援ご協力頂いたことに感謝申し上げます。

色々と申し上げましたが、本年も是非安全登山を実行して楽しく山に登つて行きましょう。有り難うございました。

## 針葉樹会会長を退任して

竹 中 彰

去る7月12日に開催された針葉樹会平成28年度総会に於いて、会長職を解かれ、小島新執行部に引継ぎました。平成18年6月の総会で選任され以来10年間、会員諸兄姉、幹事の皆さんのご支援を得て何とか職責をこなして来ました。この間に頂いた多くのご支援ご協力を深く感謝申し上げます。

会長就任時に会員の皆様に会の運営に関する方向性を出したいと、次の様なことを提起しておりました。(1)母体である一橋山岳部の復活に向けての針葉樹会としての支援、(2)会の活性化に関する方策、(3)山岳部創立90周年事業について、(4)当時メーリングリスト等で流れた懐かしい歌集の取り纏めなど。

何れも幹事等役員並びに会員諸兄姉の支援なくしては実現困難な課題であり、改めて感謝申し上げるものです。

より積極的な基礎体力作り等のF.N短大や会からの財政支援等でメドがつきつつある状況になつております。

次の②については、未だその緒についたばかりであります。

50年代卒のO.Bの積極的な参加が望まれる状況にあります。

③の90周年事業については、会員各位の支援、協力により予定通り「針葉樹15号」発刊、「芦安ファンクラブ」他との夜叉神峠周辺登山道整備事業、山岳部認知度向上策としての記念講演会と現役学生の富士登山支援などを行なつて参りました。また、資金調達面では通常会費に加えての賛助会費を会員の皆さんにお願いし、大きな協力を頂きました。

④歌集に関しては全く手付かずで残つておりますが、今や現役部員が山行時に歌を唄う機会、習慣もなくなつてゐる様で、今後そのこと自体を復活させることが先決とも考えます。

また、上記以外にこの10年の間には芦安に「針葉樹文庫」設置、中村保会員特別表彰、部室修繕、会則の改訂（会計細則、会費免除規定の運用停止、評議員会廃止・相談役新設等）がありました。

何れも幹事等役員並びに会員諸兄姉の支援なくしては実現困難な課題であり、改めて感謝申し上げるものです。

残念ながら針葉樹会の運営は65歳超、70歳台を中心とするOBに頼らざるを得ず、多くの事業活動で参加メンバーの固定化が見られ、何とかこれを打破して若いOBを含めた全員が参加する会に変えたいと考えましたが、道半ばであり今後の執行部に新機軸をして頂きたいと思います。

また、針葉樹会活動とは直接の関係はありませんが故山本健一郎会員から引継いだ形となっているメトロ会（首都圏13大学山岳部OBの懇親会、現在は北大を含めて14大学）の世話役を務め、一橋を代表して年に4回の世話人打合せ会、1回の学習院大日光光徳小屋懇親集会及び9月総会（懇親会）に出席していますが、各校とも高齢化（当初メンバーは昭和20年代後半～30年頃卒業）により、徐々に世話人の世代交替も進みつつあります。ここに所属する中央大、早大、学習院大なども一橋山岳部と前後して創立後90年を経過し、夫々が周年行事を計画し、記念パーティーなどの招待状を幾つか頂戴し、出席して祝意を表してきたところで、直近では昨年4月に慶応大山岳部100周年記念式典、祝賀会が帝國ホテルで開催されました。

更に個人的には、この10年間の間に日本山岳会東京多摩支部の創設（2010年2月）と同時に支部長に選任され、後継者に引継ぎ

できぬままに現在に至つております、この為に針葉樹会活動や個人的な山行等に制約となつて来たことが悔やまれます。しかし、色々の工作にも拘らず5月の年次総会で再任され、少なくともあと2年（場合によつては1年）はその任を務めなければならなくなつています。

支部長としては、主要拠点の立川での年次総会、年始晩餐会以外に、最低月に夫々1回開催する常任幹事会及び幹事会に加えて、登山教室PT、多摩百山PT及び4半期に一回程度の講演会、安全研修会等に顔を出さざるを得ず、時間、費用的にも馬鹿にならないところです。勿論これ等の活動を通じて会員との繋がりも広がり、会員の人材の幅広さ、深さも実感しているところです。

ご多分に洩れず、日本山岳会も高齢化（会員平均年齢68歳 や物故・退会者が顕著になり、会員総数の減少傾向が止まりません（ピーク…2001年5948人、ここ数年5000人スレスレ）。その中にあって、我が東京多摩支部は設立6年の現在、立上げ時の支部会員総数202名が300名にまで成長を見ており、この間の登山教室（2年間のカリキュラム）修了生を新入会員に勧誘した成果も大きく（3回の教室修了生の入会30人）、本部からも注目されているところです。勿論、登

山教室で2年程度実技を経験したメンバーに自立した登山者としての振る舞いを期待するのは無理な話で、入会後の育成にも意を用いる必要がある訳です。これ等は何れも先輩会員のボランタリーな活動、指導なくしては実現しません。これらの活動に関しては、支部のホームページや支部報「たま通信」で紹介しております、何れも会員による手作りですが、比較的高いレベルにあるものと自負しています。

何れにしても、針葉樹会の母体である一橋山岳部も間もなく100周年（この先6年後、2022年）を迎えることとなります。幸い現時点で、山岳部員の数も増え、針葉樹会の財政も篤志会員のご支援のお陰で安定しております、何とかこの勢いをキープして、東京五輪の先に繋げていって欲しい、会に対する引き続きの会員諸兄姉のご支援を切にお願いするものです。

## 会長就任のご挨拶

小島 和人（昭40年卒）

7月の総会で針葉樹会会長就任をお受けされた小島和人です。私は昭和40年の卒業で既に74歳でありますて会長職をお受けするには

年を取りすぎていると思っておりましたが、長く会長を務められた竹中さんが何度も辞意を表明され、若返りの候補・前神さんが会社の重職を続けておられる状況の中で、幹事会のご要請をお受けせざるを得ないと判断したものです。会社生活が始まつても休みが取れれば夏冬問わず登山を楽しんでいましたが、1970年に海外駐在が始まり、それからおよそ35年登山らしきものからは遠ざかっていました。登山を再開したのは大よそ10年前であり、会社生活を卒業してからの事で、その間針葉樹会には何も貢献していなかつたこともあって会長職をお受けして良いものか躊躇した点もあります。ただ登山を再開してから絶滅寸前の一橋大学山岳部と会員が減少していく針葉樹会の現状を目の当たりにして、日本山岳史に数々の輝かしい足跡を残してきた諸先輩の築かれた一橋山岳会の存続を図り、新しい時代の芽が育つ様に願つて、ここ数年多くの会員の皆さんと努力してきた流れを確かなものにしたいと希望しておりますので、相談役の御知恵も拝借しながら、副会長に就任した前神会員や幹事の皆さんと共に、本当の若返りまで責任を果たしたいと思っております。

(1) まず針葉樹会ですが、山好きの仲間の会として会員の皆さんのがより楽しめる会になる様に懇親山行を中心にして高い山、低い山を歩く機会が増えるように会員間の交流を活発化する手立てを考えたいと思います。山行幹事と相談して懇親山行の更なる多様化の工夫（三月会などを通じ個人山行の情報提供による山行勧誘、会報幹事と相談してより多くの会員の寄稿勧誘等）考えてまいります。幸いにしてここ数年新卒部員の加入により新しい針葉樹会員が増えています。新しい会員が懇親山行などにも参加して針葉樹会の新しい力になるように図っていきたいと思います。

(2) 針葉樹会の母体は一橋大学山岳部です。過去5年ほどの関係者の努力と再度の登山ブームで、現役部員の数は29名に達しています。数が揃つてきており、本間、中村（雅）、藤原、宮武会員らのご努力で近くの山を沢山歩き部員の体力と山歩きへの慣れは出来てきていますが、今はまだ山歩きの好きな若者の集団です。いろいろの山の楽しみ方があつて良いと思いますが、高校山岳部の復活で一橋山岳部にも高校山岳部の卒業生が入ってきており、当然雪山を含めた挑戦的な登山への期待が芽生えています。大学体育会山岳部として、また一步

間違えれば命に係わる登山者の集団として、安全第一の登山の為に、如何に技術・体力の向上を図り、規律ある登山活動にしていくかが大きな課題です。外部登山教室・登山の際のガイドあるいはコーチの活用など技術の積み重ねと会則などルール面の見直しを学生さんと共に検討実施していくために、学生担当幹事の皆さんと知恵を絞つて支援していきたいと思います。

(3) 三番目は現役部員と針葉樹会員の交流です。そのような場は懇親山行・新緑の宴・月見の宴・総会・新年会などありますが、新たな機会も含めてもっと多くの会員が学生と懇談し、山を歩き、そして親交を深める機会を増やせないか考えていきたいと思います。私達も現役時代多くの先輩に御馳走になり山にもご一緒し、山登りを教わり就職さえもお世話になりました。体育会の他部の様子を聞いてみると、時代が変わつても先輩後輩の交流は学生さんにとって期待している部分があると理解しています。少し長くなりましたが会長就任に当たり考え方を述べさせて頂きました。

今まで会員の皆さんには色々と会に貢献して頂きました。特に会費と協賛金に基づく財政基盤には多大な貢献を頂き、会が成り立つてきました。今後とも会員の皆様のこの面での

ご協力をお願いして、挨拶とさせていただきます。

## 現役山岳部から

中村保さん

「アジア黄金のピッケル賞」を受賞

2016年11月4日、ソウルで開催された第11回アジア黄金のピッケル賞(Piolets d'or Asia)授賞式で、中村保さん(昭和33年卒)が『アジア黄金のピッケル賞』を受賞されました。お祝い申しあげます。



(左から) KAF会長、中村、川崎(山溪副社長)  
萩原浩司(山溪)の各氏

### 安全登山普及指導者中央研修会への 参加報告

内海 拓人(法3年)

2016年6月24日～26日

国立登山研修所にて

部員数が増え、学生主体の活動が始まつてから2年目となつた。テント泊山行も盛んに行われるなど活動は活発になつたが、(高校山岳部出身の者を除けば)ほぼ素人集団であることに変わりはない。安全面を考慮するところのままでは良くないと考え、読図・プランニングの基礎知識を身につけるために国立登山研修所が行つている安全登山普及指導者研修会に参加してきた。

この研修会は、山岳会や山岳部のリーダー、リーダー候補など指導的立場にある者が技術を習得して、部に伝達することを目的とした2泊3日の研修である。

事前課題として概念図の作成やロープワークが課された。概念図については1年生の田中に作成方法を教わり、ロープワークは本やネットで勉強した。また、個人装備表にあつたロープやハーネス、ガチャ類は部になかつ

たので、OBの藤原さんに貸して頂いた(結局読図コースではロープワークは使わなかつた)。

6月24日

北陸新幹線に揺られながら、僕は不安でいっぱいだった。果たして僕のような素人がついていける講習なのか、他に大学生は参加しているのか、検討がつかないことばかりだった。富山駅から電鉄に乗り換え、立山駅を目指した。車窓からは富山の美しい山並みが見えていた。立山駅から登山研修所までは歩いて2分ほどだった。到着して班分けの名簿を見ると、3人班の全員が大学生だった。ひとまず同世代の仲間がいることに安心した。

開会式を終え、早速読図の講義が始まった。講義の序盤は、概念図を作成するときに独学で得た知識で対応できる内容だった。だが、ムカデ図(地形図から読み取った内容を細かく地形図に書き込んだもの)など初めて聞く内容も多かった。

講義が終わると、班別研修が始まった。ここではコンパスの使い方の基本を学んだ。今までコンパスは持っているものの、方位確認以外の使い方がわかつていなかった。こんな初心者の僕にでも理解できるような、とても

わかりやすい解説であった。

班別研修後、同じ班のメンバーと話していくとすぐに仲良くなつた。他の部の状況、自分よりもレベルが高い人の話を聞くと、とても参考になるし楽しい。そして、みんな何よりも山が好きであることが伝わってきた。

夕食後、班別に別れて翌日歩くコースの地形図の読み込みを行つた。こんなにしっかりと地形図に向き合い、細かく読んだことはなかつた（そもそも山と高原地図しか使っていなかつた）ので、地形図にはこんなにもたくさん的情報が含まれているのか、と驚きの連続だつた。この読図を元に、翌日の山行の注意点、持っていく装備の確認などを行つた。

こうしてみると、今まで行つてきたのは行程決めに過ぎず、リスクマネジメントを含めた本当の意味でのプランニングはできていなかつたと痛感した。

6月25日

2日目のメインは、昨日読んだ地形図の場所が実際にはどのような地形になつているのか、山を歩きながら確認することだつた。7:30 頃から研修所近くの大辻山に向けて歩き出した。天気予報はよくなかったが、幸いにも雨は降つていなかつた。

まずは、沢を登つて山頂に続く尾根上のコ

ルを目指した。沢は僕が想像していた以上にしっかりとしたものだつた。特にロープを使う場面などはなかつたが、前夜からの雨で水量は多めで、滑りやすい岩の上を歩くのは苦戦した。沢を歩くのは初めての僕は、他の班員ふたりと比べて歩き方がおぼつかなかつた。谷や尾根など特徴的な地形が現れた時点で地形図を確認して、現在地の特定を行つた。

班員3人でのディスカッションと先生のアドバイスによって、現在地を特定するためには今まで通つてきた道の状況も踏まえた「予測と確認の繰り返し」が大切であるとわかつた。現在地を特定することは難しいが、自分の推測が正しいとわかつたとき、地図読みの楽しさに気づいた気がする。

大辻山から下山後、近くの雑木林に移動してコンパスを使って直進する練習を行つた。藪こぎをしながら目標地点までコンパスだけを頼りに直進するのだが、想像以上にうまくいかない。自分の「真っ直ぐ進んでいる」という感覚がどれほどあてにならないかということを痛感した。

研修所に戻ると、今日の行動の反省と、翌日の藪こぎで読図を頼りに目標地点まで到達する練習の準備をした。事前に読図をしてから実際の地形を見ると、読図から自分が想像した地形と現実の地形のギャップが大きいといよいよ藪の中へと入つていった。コンパスで方角を確認しながら進むが、背丈ほどの

感じた。この感覚を翌日に活かせるように、特徴的な地形を洗いだし、入念な予想・計画を行つた。翌日の天気予報は雨だつた。藪こぎで雨は嫌だなと思いながら、一日中体と頭を使った疲れですぐに寝ることができた。

6月26日

天気はもつた。雨は降つておらず、むしろ涼しくて動きやすそうだつた。歩く際には3人のうち誰かがリーダーを担当し、最初は僕が担当した。「それでは準備体操をしてください」と言うと、講師の先生からリーダーはもつと声を張るべきだというご指導を頂いた。また、出発前にはパーティーのメンバーが互いに体調と装備の確認をするように、と教えて頂いた。こういったリーダーとしてやるべきことなどは普段の活動で誰かに教わることができないので、とても貴重な経験であった。

7:30 頃、昨日下つてきた道を出発地点のピークまで進んだ。ピークで一度立ち止まり、昨日藪こぎをするまでのリスクを考えて話し合つた通り、ヘルメットとゲーター、手袋を装着した。こうした判断は事前に地形図を読み合つた通り、ヘルメットとゲーター、手袋を装着した。こうした判断は事前に地形図を読んでコースの様子を掴んでおかないとできないと感じた。

いよいよ藪の中へと入つていった。コンパスで方角を確認しながら進むが、背丈ほどの

高さがある藪の中では自分が真っ直ぐ進めているのかいまいちわからない。しばらく進むと、想定していなかつた急斜面に出た。どこかで間違えたのだろうと、立ち止まって地形図を広げた。この練習で大事なことは、周囲の状況から地形図上の現在地を特定することであった。東側に続く急斜面をヒントとして、3人で現在地の可能性を話し合つた。しかし、思つたように現在地の検討をつけることができない。視界が悪い藪の中では、周囲の地形を把握することもままならない。講師の先生からは、「とにかく尾根を歩くことを意識して、一番高い場所を歩く感覚を覚えるように」とアドバイスを頂いた。試行錯誤を繰り返して何とか軌道修正し、一度は正しい尾根に戻つた。

しかしその後、僕が地図を紛失してしまうトラブルが発生して、リーダーを交代するところになつた。そして、計画段階で「迷うかもしれない」と話し合つていた箇所で間違つた尾根に入り込んでしまつた。状況を把握するために3人で手分けして周囲の様子を確認しようとすると、「焦つているときほど、チームがバラバラに行動するのは危険だ」と指導を頂いた。たしかに自分を見つめ直すと、どこか焦つている自分がいた。リーダーとしてチームを率いるためには、トラブルが起きた

ときこそ冷静さを保つことが重要だと気付かされた。

間違つた尾根をすいぶん下つてきてしまつていたため、登り返して元の尾根を探すか、そのまま下り続けるか、判断を迫られた。制限時間との兼ね合い、そして地形図上からこの先に危険箇所はないかと予想できたことから、今回はそのまま尾根を下り続けることになつた。道に迷つたときは、現在地がわかる場所まで戻るのが原則だが、きちんと知識と経験を積めばより合理的な判断ができると感じた。

深い藪に足をとられながら、ようやく舗装路が見えてきたときは正直ほつとした。だが、到着したのは目標点からは大きく逸れた地点であった。ここまでの一日半ほどで地形図の知識はだいぶ身に付いたと思っていたが、まだ実践では使えないレベルの知識であることを実感した。本当に地形図を山の中で使いこなせるようにするためには、読図→フィールドでの確認→反省のサイクルを繰り返す必要がある。今回失敗した悔しさを忘れず、今後も継続的に読図に取り組んでいきたいと思つた。

研修所に戻つて3日間で学んだことの総括を行い、プログラムは一通り終了した。閉会式までの昼食のときに、講師の先生にどのよ

うに部をチームとしてつくりあげるべきか尋ねてみた。先生は、「一番大切なことは『長期的なものから逆算して目標を設定すること』であるとおっしゃった。この話を聞いて僕は、今の一橋山岳部に欠けていて一番大切なものはチームとしての目標であると改めて気付かされた。

閉会式が終わると、不思議と帰りたくないと思った。もう何日間か研修を受けていたい、そう思えるほど充実した時間だった。同じ班員の一人が車で送つてくれるということで、3人で一緒に富山駅に向かつた。僕よりレベルの高い（ひとりは6000m級のヒマラヤ登山経験があつた）2人の話を聞いていると、純粋にすごい山に登りたいという気持ちがわいてきた。

富山駅で一緒にお土産を買い、それぞれの帰路についた。班員に恵まれ、2泊3日で思つていた以上に仲良くなれたので別れ際は少し寂しかつた。日曜の上り方面の新幹線は思つていたよりも混んでいて、立ち席の切符しか残つていなかつた。北陸新幹線のデッキに座つて、学んだことを帰つて部にどのように伝えようか、自分は部のために何をすべきなのか、そして今後部はどのような方向に向かっていくべきか、色々考えているとあつという間に大宮駅に到着した。

## 総括

今回の研修会は予想よりもはるかに充実していく、得るものが多く多かった。

まず技術面では、読図の重要性を認識し、基礎知識を得ることができた。地形図には山と高原地図では得られない情報が詰まっている。それは安全登山を行う上で欠かせないものであることがわかった。今後の活動では、ただ漫然と山に登るだけでなく、読図を用いた山行のプランニングと振り返りを徹底すべきであると感じた。

また、リーダーとしてやるべきことや心構えについても学ぶことが多かった。講師の先生は現在も出身大学の部を指導しており、大学山岳部がどのようなものか、そしてそのリーダーの役割について多くのことを教えてくださった。また、他大の部の様子について聞くことで、自分の部の状況を客観的に捉えることができ、レベルの高い活動内容についての話を聞くことはよい刺激となつた。今後、積極的に学外と接点を持つことが重要であると感じた。

技術や部の運営方法についての伝承が途絶えてしまつていて、それを補うために積極的に動くことが重要である。これから多くの部員がこうした研修会などに参加するようにしていきたい。

## 八ヶ岳縦走山行

大矢 和樹(法学部3年)

2016年5月 28 ~ 29日

メンバー 内海拓人(C.L法3)、大矢和樹(S.L法3)、曲文琛(社3)、原島大介(商2)、坂本遼(法2)、小久保剣(法2)、田中亨(商1)、岩崎拓実(法1)

### コース

《1日目》 10:35 麦草峠 → 11:20 丸山 → 12:20 白駒池にゅう方面分岐点(昼食20分) → 13:45 にゅう山頂(休憩25分) → 15:00 中山峠 → 15:10 黒百合平

《2日目》 5:00 黒百合平 → 5:05 中山峠 → 6:15 天狗岳山頂(休憩15分) → 6:55 根石岳山頂 → 7:25 夏沢峠(休憩10分) → 8:25 硫黄岳山頂(休憩20分) → 9:00 赤岩の頭 → 9:50 赤岳鉱泉 → 12:20 美濃戸口

### 《1日目》

今回の人ヶ岳山行は昨年の同時期の人ヶ岳山行が気候的に非常に良かつたことが思い出された上、新入生にはテント泊に慣れてもらおうということで計画されたものである。起點を麦草峠に据えたのは、北人ヶ岳方面から縦走できるためである。僕自身、テント泊は実際に昨年9月末の北アルプス表銀座縦走以来であり、夏に向けてある意味でリハビリのような側面もあつた。

天気はほぼ終始晴れしており、絶好のコンディションであった。初日麦草峠へ向かうタクシーの中で八ヶ岳方面を見ると薄雲が出ているのが少し気になつたが、タクシーの運転手の方に聞いたところ、天候は問題ない、ただしやや寒いかもしないとのことだつた。

実際に、麦草峠に降り立つてみると、やや肌寒く感じられた。しかし、時々吹きぬける涼しい風を感じると、八ヶ岳に来たのだなあと感慨に浸り、またテンションが高まつた。麦草峠についていうと、トイレはやや登山口から離れたところにあるという点は注意されたい。

麦草峠から丸山にかけては、地図上一か所小ピーチが存在するが、ほとんど気にならないレベルのものである。道は雨が降つた後であるとぬかるみそうな個所が多い。また、丸山直下は踏み跡やリボンを丁寧に見ていかないと一瞬道がわからなくなることがあつた。もつとも、終始今回の山行の先頭は私が歩いたが、何度もか道を外れそうになつたのでまだまだルートファインディング能力が低いと痛感させられた。

毎度、私が先頭を歩く山行は登り始めのペースが異常に早く非難を浴びるところでは

あるので、今回はかなり気にかけて抑えて入った結果、麦草峠から丸山にかけてはコースタイムの9割前後であった。丸山はれつきとした一つの山であるが標高があまり高くないために展望はあまりきかないのはやや残念であるが、山頂には少しスペースが存在するので休憩をとるには適している。

丸山から高見石方面への道は、丸山直下は石が多く少々急であるため、やや歩きにくいがすぐに平坦な道になった。ほどなくして高見石小屋を通過したが、問題が発生した。地図上にある高見石自体が見つからなかつたもの、何故見落としたかは謎である。白駒池への下り道は比較的緩やかだったのでテンポよく下ることができた。あたりを見渡せば、まだ色の薄い新緑が森全体を覆っていて、森全体が生き生きとしているように感じられた。5月下旬の北八ヶ岳は森の中では暑でも涼涼な空気に満たされていて、深呼吸をすると体の中が洗われるようさえ感じられるところである。

白駒池に到着すると、登山客ではない写真家の方や、ちょっと散策していますというようないでたちの方に会つた。白駒池自体は我々のような面倒なコースを通ることなく、国道299号線沿いの駐車場から比較的のア

セスしやすいため、当然といえば当然なのかかもしれない。写真では紅葉の季節が最高に良いということは知っていたので、紅葉にも訪れてみたいと思ったが、紅葉の季節でなくとも静謐な湖畔に佇むというのはまた一興であつた。湖畔で昼飯を摂ると、いよいよにゅうに向けて歩き出した。すると湖畔を離れてまもなく、ちょっとした湿原のような場所に出た。広くはなかつたが、周囲が森林で囲まれているところにあるのでちよつとしたオアシスのような空間であつた。にゅうへの登りも丸山への登りと比較的似た様相を呈した。

北八ヶ岳の山林の中をひたすら黙々と登つていく。黙々と登つている中で、ふと足元に視線を落とすとこけの種類の多さにも気づく。種類だけではなく、コケは実際に生えている絶対量も多いと感じた。そういうわれてみれば、過去に北八ヶ岳を訪れた時も結構霧がかかっていることが多いように感じる。このような湿潤な環境がコケの多様性を生み出しているのであろう。

ほどなくしてにゅうに到着した。にゅうの山頂は岩がちである。しかしながら、景色は非常に良い。眼下には白駒池のほか、JR小海線沿いの町と思われる町も一望できた。南側に目を向けると雄大な硫黄岳や天狗岳も見えた。さらに硫黄岳の裾野付近に小さく富士

山もしつかり見ることができた。

想像以上に良い景色で盛り上がりながら山頂に長く居すぎてしまつたため、にゅうから中山峠までは少々速いペースで歩いた。基本的に尾根を歩いていくのでアップダウンはそれほどなかつた。尾根を歩いているものの、尾根の幅が広い上、森の中なので尾根を歩いているような感じはしない。ここもただひたすらに歩いていたら中山峠に到着した。中山峠は個人的には昨年3月以来であり、前回来たときは積雪期であつたためやや印象が異なつた。中山峠から黒百合平へ行くのは一瞬であつた。途中木道が整備されていた。

黒百合平はおそらく激混みであろうと覚悟していたが、想像以上に空いていて驚きであつた。そのためテントは非常に立てやすかつた。テントの設営に関して、高校山岳部出身の田中にポールはテントに通しながら組み立てるものだということを初めて習つた。6人用テントを二つ用意していたので、それぞれ4人ずつテントに入るよう割り振つたが、テント内はかなり余裕があり、快適であった。食事に関しては天候も安定しているうえ、さほど寒くなかったので久々外で調理した。豚汁の準備は二年生が担当したが、味もよく、非常によくできていた。旨かつた。炊飯は自信満々の内海が担当したが、さすがの出来栄

えであった。アルファ米の方が軽くてよい面もあるが、普通のコメの方がやはり実際食べてみるとうまいので、できればこれからもコメは炊くようにしていきたい。夕食の準備をしている頃は、まだ上空に薄雲が広がつてたが、徐々に雲は薄くなり、夕食食べ終わつたころにはすっかり晴れ渡つていたので、満天の星空を期待した。なお夜は8時ごろ就寝ということにしたが、僕は何故か眠れなかつたので一人テントの外に出たが、空には期待通りの満天の星空であり非常に感動した。この時点で、黒百合ヒュッテの前の気温計はまだプラス値を示しており、それほど気温は下がらないのではないかと思つていたが、実際はそんなことはなかつた。

## 《2日目》

起きたのは午前2時。起床予定よりも一時間も早く起きてしまつた。気温は零下4度まで下がつていていた。することもないでの30分くらいシユラフにくるまつていたが、また星空を見に行こうと思い、早めにテントを出たところ月が煌々と照つていた。午後8時は少々人影や、ヘッドランプの明かりも見えていたが、午前2時半の黒百合平には人気とヘッドランプの明かりは皆無である。周囲には自分一人しかいない静謐な環境の中で見る星空は

何にも代えがたい感動を与えてくれる。そして、ぼつと佇んで月をみながら、イヤホンから流れる絢香の三日月を聴いているとき、なにかこみ上げるものを感じた。

午前3時になるとみな起き始め、朝食の準備を開始した。朝食もかなりスマーズに行えた。朝食はいつも通りラーメンにコーヒーである。ラーメンにしても、コーヒーにしても少し液体を残しておくと完全に凍り付いてしまうほどの寒さであった。テントのフライシートにはびっしり露が凍り付き、なかなか取りにくかつた。今から考えればこのときしっかり氷を取つておくべきだつたと感じた。

出発は予定通り5時に出発した。中山峠から少々登つた地点が開けていて、北アルプスや大菩薩方面等々の山々を一望できる上、麓が朝霧の流動の中で見え隠れしている風景があまりに幻想的であつたので、ついつい見とれたり写真を撮つたりしたら少し休みすぎてしまつた。天狗岳への道は想像以上に岩がちで歩きにくく、積雪期のイメージとは全く違つた。しかしながら、天狗岳には休憩時間を除けばコースタイムよりだいぶ早い時間で登頂することができた。ほぼ完全な快晴で、中央アルプス、北アルプスは立山、剣岳の方まで、御嶽山、妙高山系、日光方面すべて見

ることができて感動であった。天狗岳の山頂は比較的とがつてるので流石に圧巻の景色であった。南側にはこれから自分たちが進んでいく道がはつきり見えてなおやる気がでてきた。

少々長めに休憩を取つて、硫黄岳に向かつて歩き出した。天狗岳から少し下つたところで、硫黄岳へ向かう景色が北アルプス表銀座の燕岳方面から歩いて大下りの頭から大天井岳方面を眺めた時の景色と類似していると感じた。天狗岳を下りきると素晴らしい稜線歩きになつた。稜線を吹き抜ける風が頬を撫でる感覺は格別である。途中、根石岳を通過したが想像以上にしっかりとピーキーであり、少々驚いた。根石岳から夏沢峠にかけてはかなり長い下り坂が続いているなどという感覚であった。しかし勾配はきつないので歩きやすかつた。しかしこのころから、リュックサックが重いと感じていた。あとから確認したところ、フライシートの露が融解してリュック内で浸水し、服が水を吸つていて重くなつたのだと判明した。今回は一泊二日の山行だったので問題にはならなかつたが、数日間続く縦走であれば致命的なミスであるので、今後は気を付けなければならないと感じた。夏沢峠に到着し硫黄岳を見上げるとその標高差にやや絶望したが、本日最後の登りだ

と思つて頑張つた。ちなみに夏沢峠から見えるのは硫黄岳のピークではなく、だいたい人合目に当たる部分である。実際に登つてみると峠から見える地点までは30分かかるなど、峠で登ることができたが、そこから実際の山頂までが非常に長く感じた。

ちなかつたのは素晴らしいことであると感じた。今回も様々な反省点があつたので、次の山行に生かしていきたい。なんといっても最高の週末であつた。

八ヶ岳縦走行行その二

田中亨(商1年)

事前準備

る向きを間違えそうである。近くには爆裂噴火口が存在し、壯觀であつた。景色は天狗岳より標高が高いこと也有つて良いが、高度感はあまり感じられなかつた。しかし相変わらず天氣は良かつたので、良い景色を堪能できた。風が比較的しつかり吹いており、フリースを着ていないと寒く感じた。

硫黄岳からはひたすら下りである。硫黄岳の直下は人通りが多い割には狭く、岩がちなので気を付けた方が良い。赤岩の頭から赤岳鉱泉までは快調に飛ばせた。コースタイムの半分くらいのペースであつたのでだいぶ下りも速くなつてきたよう思う。赤岳鉱泉まではよかつたが、感覺としてはここから美濃戸口までが果てしなく長く感じられた。勾配はほとんどないので平坦な部分を歩いているような感覺であった。美濃戸口についたときに

全山行を通して一年生は二人とも運動部出身だけあって非常に体力があり、ペースが落

朝は電車の時間が長かったため、とりあえず体力温存もかねて電車内では休眠をとつ

理を行つてくださつた。私は前日までに個人装備のα米の予備食、非常食、医具・裁縫用具一式、携帯トイレ、スパッツ等を準備した。今回はテント類はほとんど先輩方に持つていただいたので、私は共同装備がテント・ポールだけだつたこともあり、水を多めに4リットル入れても15キロ弱でとても軽く感じた。

た。現地のジャンボタクシーでは少し酔ったが、降りた後のすこしひんやりした麦草ヒュッテは私に始まりの高揚感を与えてくれた。その後しばらくすると山の中に入り少し急登を上ると丸山についた。小さな頂上に神社があつたのは驚き、山岳信仰の深さを感じた。事前にこの場所に三角点があるのを確認していたにもかかわらず、現場で確認できなかつたのは多少の心残りである。その後緩やかな下りを過ぎると白駒池についた。ボートが浮かんでいた白駒荘とは反対に曲がり白駒池の周りを歩いた。とてもきれいな白駒池を眺めながら昼食を取り、今後訪れるであろう本日最大の敵、ニュウ手前の登りに向けて銳氣を養つた。ここまで山の中を歩いたり、湿原の横を歩いたりなどそれほど高度を感じることはなかつた。しかし、ニュウは高かつた。巨石の周りには自分より高いモノは何もなく2000メートル以上の高さに自分がいることを実感した。その後は下りが続き本日の幕営地黒百合平に到着した。到着後すぐにはテントを張り夕食の調理に取りかかつた。本日の夕食はレトルトカレーと豚汁だつた。先輩方の事前準備のおかげでとてもおいしい夕食になつた。夕食後は先輩からコーヒーをいただき一日の疲れを癒やした。その後はみんなで特朗普ゲームを行い、先輩方がとても

興味深い（＾＾）話をたくさんしてくださった。就寝は21時で、気づいたら眠りに落ちていた。

5月 29日

3時に起床後お湯を沸かし、朝食のラーメンを食べた。その後テントを撤収し5時に出発。朝はとても寒くフリースとダウンを羽織つての出発となつた。東天狗岳の前には岩場の登りがあつたが、景色は最高だった。その後根石岳を超えた後、一旦夏沢峠までくだり硫黄岳を目指した。どこまで行つても登りの景色が見えるという長くつらい時間だったが、硫黄岳からの景色は360度見渡すことができる、今までの登りのつらさを差し引いてもあまりある光景だつた。そこで長めの休憩と記念撮影を行い景色とお別れをすると、そこから後は主に緩やかな下りで最後は林道に入り今回の山行との別れを惜しみながら美濃戸口に到着した。帰りは小学生ぶりくらいに二階建ての電車に乗り帰宅した。

今回は大学入つてから初めての合宿で、装備やメンバーなどが一新された新しい環境での合宿に多少の不安もあつた。しかし、それを吹き飛ばす先輩方や同期、さらには私を含め暖かく迎え入れてくれた山の存在に触れとても楽しい山行となつた。東京からはア

ルプスへの交通利便も良くこれからも新たなる魅力的な山とあえたらなと思う。

### 夏合宿(常念山脈縦走)

内海 拓人(法3年)

参加者 内海拓人(CL3年法)、大矢和樹(3年法)、安藤由都(2年法)、小久保剣(2年法)、坂本遼(SL2年法)、原島大介(2年商)、山本竜希(1年社)

### 行程

8月 16日	11:25	中房温泉→12:25 第一登山
チ	→14:00	合戦小屋→15:10 燕山荘
8月 17日	3:30	起床→4:30 燕山荘→4:50 燕岳
5:10→5:30	燕山荘	6:20→7:05 大下りノ頭
→9:00	大天莊	→9:15 大天井岳
天莊	9:50→12:10	常念小屋
8月 18日	3:00	起床→4:30 常念小屋→5:50 常念岳
6:10→9:20	蝶ヶ岳	9:40→10:15 蝶ヶ岳
→10:25	蝶ヶ岳ヒュッテ	10:45→13:40 徳沢
14:00→15:30	小梨平キャンプ場	
8月 19日	5:00	起床→7:00 上高地アルペン
ホテル	→10:05	上高地バスター・ミナル→
12:00	松本駅	

8月 20日 予備日

この合宿は、8月上旬の甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳に続く今年2回目の夏合宿である。計画の骨子は2年生の安藤、坂本が立てた。5月頃の計画当初の段階では、2年生の間では穗高へ行くことも考えられていたが、岩場やハンゴの経験値が不足していると判断して今年は見送った。そこで、去年の9月に悪天候のため途中で中止となつた常念山脈の縦走を行うこととなつた。本格的な冬山合宿を行つてない中、この夏合宿を成功させることができにとつて一つの目標であった。今年こそは何としても成功させたかった。

### 8月20日 事前ミーティング

甲斐駒ヶ岳・仙丈ヶ岳の合宿の翌日、ヨーグス概況や装備分担、献立等の確認のために事前ミーティングを行つた。朝食のメニューを調理に時間のかからないパンに変更するなど、前の合宿の反省を活かした提案がされた点は非常に良かつた。また、去年の常念山脈縦走に参加した大矢、坂本が実際に歩いた経験を全体に共有できたことも良かつた。しかし、装備分担に関しては話し合いが甘い部分があり、結局出発前日に足りない装備を買はずなど、準備に余裕がなかつた。

## 1日目 8月16日 晴れ時々曇り

出発2日前まで天気予報は最悪だった。台風が接近しており、本当に16日に出発することができるかどうかさえ怪しかった。前日になつてやつと予報はましになつたが、停滞する可能性は否めなかつた。そのため、予備日を含めた5日分の食料をザックに詰め込んだ。

穗高駅からジヤンボタクシーに乗り、中房温泉に到着すると思っていたよりも天気が良くな、暑かつた。この暑さの中合戦尾根を登るのは辛そうであつた。準備体操を終えて登り始めると、いきなり急登であつた。荷物の重さと蒸し暑さで体力を奪われた。疲れたな、と思うと丁度よいタイミングでベンチや小屋が現われた。燕山荘に近づくまで眺望のきかない樹林帯であつたため、正直歩いていてもあまり面白くはなかつた。ようやく樹林帯を抜けたと思ったら、辺りはガスで真っ白であつた。景色が見えないことを残念に思いながら歩いていると、予想より早く燕山荘に到着した。時計を見ると予定より1時間程早い到着であつた。

テント場は比較的空いており、調理なども広々と行うことができた。風が吹くと下界では考えられない寒さで、防寒具が必要であつた。常念山脈の山小屋では水は有料で、1リッ

トル200円かかつた。南アルプスの北沢峠は横に川が流れしており、水浴びができるほど水が豊富だつたため、少し不便を感じじてしができるかどうかさえ怪しかつた。前日になつてやつと予報はましになつたが、停滞する可能性は否めなかつた。そのため、予備日を含めた5日分の食料をザックに詰め込んだ。

穗高駅からジヤンボタクシーに乗り、中房温泉に到着すると思っていたよりも天気が良くな、暑かつた。この暑さの中合戦尾根を登るのは辛そうであつた。準備体操を終えて登り始めると、いきなり急登であつた。荷物の重さと蒸し暑さで体力を奪われた。疲れたな、と思うと丁度よいタイミングでベンチや小屋が現われた。燕山荘に近づくまで眺望のきかない樹林帯であつたため、正直歩いていてもあまり面白くはなかつた。ようやく樹林帯を抜けたと思ったら、辺りはガスで真っ白であつた。景色が見えないことを残念に思いながら歩いていると、予想より早く燕山荘に到着した。時計を見ると予定より1時間程早い到着であつた。

テント場は比較的空いており、調理なども広々と行うことができた。風が吹くと下界では考えられない寒さで、防寒具が必要であつた。常念山脈の山小屋では水は有料で、1リッ

## 2日目 8月17日 霧、一時雨

3時に起きて外に出ると雨は降つておらず、ひとまずほつとした。結構冷え込んでおり、動き出すまではダウンを着て丁度よいくらいだつた。テント場からはふもとの街の夜景が綺麗に見えた。星も見え、もしかしたら燕岳から景色が見えるかもしれないという期待を抱きながら朝食をとつた。今回の合宿では朝食を麺類からパンに変更したため、以前よりも出発までの時間を大きく短縮することができた。出発の4:30頃には周囲が明るくな

り始めた。

燕岳までの道はアップダウンもなく、と

3時に起きて外に出ると雨は降つておらず、ひとまずほつとした。結構冷え込んでおり、動き出すまではダウンを着て丁度よいくらいだつた。テント場からはふもとの街の夜景が綺麗に見えた。星も見え、もしかしたら燕岳から景色が見えるかもしれないという期待を抱きながら朝食をとつた。今回の合宿では朝食を麺類からパンに変更したため、以前よりも出発までの時間を大きく短縮することができます。出発の4:30頃には周囲が明るくな

り始めた。

大天荘手前は、去年歩いたことのある大矢と坂本が言つていた通り急登であつた。大天荘までの距離を示す看板が設置されていたが、むしろ残りの距離数を示される方が辛かつた。辛いとは言いつつも、大天荘に着いて時計を見ると去年よりだいぶ早いペースで登ることができて、小屋の横に荷物をデポして、大天井岳に向かって歩き始めた。山頂には10分程で到着したが、人は誰もおら

ても歩きやすかつた。ただ、周囲はガスに包まれており、山頂からの景色はあまり期待できなかつた。予想通り、山頂に着いても周りは真つ白だつた。ガスが抜ける一瞬を待つて写真を撮り、燕山荘へ引き返した。途中でイルカ岩という岩があり、本当にイルカの顔の形のように見えた。このように何かに見えるという岩は山にはたくさんあるが、ここまで納得できたのは初めてかもしない。

テント場で撤収を済ませると、再び荷物が重くなつて若干憂鬱だつた。小屋の前で軽くミーティングを行つて今日の行程を確認してから出発した。燕山荘から続く道は表銀座の縦走コースとも被つており、本来は北アルプスの素晴らしい景色を楽しめるはずなのだが、終始霧が出ていた。稜線の西側の谷からガスがわいてきているようで、体の右半分が濡れた。

大天荘手前は、去年歩いたことのある大矢と坂本が言つていた通り急登であつた。大天荘までの距離を示す看板が設置されていたが、むしろ残りの距離数を示される方が辛かつた。辛いとは言いつつも、大天荘に着いて時計を見ると去年よりだいぶ早いペースで登ることができて、小屋の横に荷物をデポして、大天井岳に向かって歩き始めた。山頂には10分程で到着したが、人は誰もおら

ず、景色は全く見えず、天候がどんどん悪くなつていった。雨は強まるばかりで、長時間滞在していても仕方がないので、看板の横で自撮りで集合写真を撮つて山頂を後にした。小屋に戻ると雨は本降りになり、嫌々レインウェアを着た。動かないと体が冷えるので、短めに休憩を取つて再び歩き始めた。

天候悪化のため気分が沈んでいたが、幸いにも雨は長くは続かなかつた。1時間程経つと霧が晴れる時間もあり、これから歩く稜線が綺麗に見えた。アップダウンは続くが、強く記憶に残るほど辛い箇所は無かつた。3、40分に1回休憩をしながら順調なペースで歩いていると、12時頃にもう常念小屋が見えてしまつた。2日目は最も長い距離を歩くと警戒していただけに、少し拍子抜けだつた。テント場に着いて設営を終えると、まだまだ夕食までは時間があつた。テントに入ると昼寝をしたりラジオで甲子園を聞いたりと、各々のんびり過ごせた。15時半頃に空腹に耐えきれず夕食の支度を始めた。今日のメニューは、山本が高校の部でよくトマト缶を使っていたという話を聞いて僕が提案したメニューだった。トマト缶にソーセージの缶詰を入れて、コンソメで味付けして煮込んだ。味見の段階では後輩の反応が悪く、また僕が提案したメニューが失敗したか、と不安に

なつたが、最終的にはとても美味しく仕上がつた。このメニューは今後もりピートして良いと思う。

夕食が終わると、翌日の行程について話し合つた。当初は蝶ヶ岳ヒュッテに宿泊する予定だつたが、今日の歩くペースを考えると少なくとも徳沢までは下山できそつた。しかし、天候がそこまで良くなかつたので、ここまで山頂から景色を見ることができていなかつた。そこで、明日常念岳または蝶ヶ岳から景色が見えれば徳沢まで下り、景色が見えなければ蝶ヶ岳ヒュッテに泊まつて翌日の朝に蝶ヶ岳に再び登ることにした。天気予報を確認すると明日も大きく崩れることはなさそうだつた。徳沢まで下ることができれば上高地で時間に余裕が生まれるので、できれば下つてしまつた。またみんなでトランプをして遊び、19時頃に就寝した。

### 3日目 8月18日 霧のち晴れ、午後に雨

起床して外に出ると冷え込んでいた。お湯を沸かして飲んだインスタントスープが身に染みる。ここで晴れて常念岳から景色が見えれば、悔いなく上高地を目指すことができる。周囲が明るくなるのをドキドキしながら待つた。

出発してから徐々に周りの様子が見えてき

た。雲が多めであった。そびえ立つ常念岳の山頂は下からはよく見えなかつた。歩いているうちに雲が抜けるように祈りながら登つた。山頂までの長い登りは、起き抜けの体には少しハードだつた。だが、途中雲が切れて今まで歩いてきた稜線や雲海を見ることができ、元気が出た。30分に1回ほどこまめに短い休憩を取りながら、6時前には山頂に到着できた。山頂は思ったより狭く、下に雲海が広がっていることもあり随分高い所に来たな、という印象を抱いた。雲は多めだが、十分景色を楽しむことができた。思つたより早いペースで登れたので、記念撮影などを少しのんびり過ごした。

20分程山頂で過ごした後、蝶ヶ岳に向けて出発した。ここのはりは、危険は感じないもの大きい岩が多く歩きにくかつた。また、地図上に載つているチェックポイントらしき標高点を見つけることができず、今どこを歩いているかを掴むことができなかつた。周囲はしばらくガスに覆われて景色を楽しむこともできず、歩いていて面白くなかつた。しばらく歩くと、秩父や奥多摩を思わせるような樹林帶の中をアップダウンする箇所もあつた。稜線と異なり、風も抜けないので暑い。このような場所が北アルプスにあることが少し意外だつた。

大きなピークを登りきると蝶ヶ岳の看板が見えた。ちょうど天気も良くなつて久しぶりに晴れ間がのぞき、これから歩く稜線が一望できた。この3日間で一番の絶景に気分が高まつた。相変わらずペースは（オーバーペースではないかと心配になるくらい）順調であつたので、長めの休憩を取つた。

歩き始めてからも天気は良好であつた。

久々に見た青空と稜線の緑のコントラストが美しく、先には蝶ヶ岳が見えた。こういう瞬間があるから山に登るのは止められないのだな、と思いながら清々しい気持ちで歩いた。蝶ヶ岳ヒュッテに着くと荷物を置き、空身で蝶ヶ岳山頂へ向かつた。少し雲が増えてきていたが、十分に満足のいく景色だった。山頂には自衛隊の方々がいた。集合写真を撮つて頂いたときには話を聞くと、訓練のために登り、すぐに下つてしまふそうだ。このような理由で山に登る方々もいるのだと思うと、面白いと感じた。荷物を取つてヒュッテから出發しようとしていると、隊員用のレトルトのハンバーグを分けて下さつた。1つしかないでの、誰が食べるか揉めそぐだな、と少し心配になつた。

時間に余裕があり、満足のいく景色も見ることができたので、計画書の予定より早く下界を目指すことにした。地図を見る限り徳沢

までの下りが長くて急で辛そうだな、と予想がついた。下り始めるとすぐに樹林帯に入つてしまつて景色も楽しめないので、他愛もない話をしながらひたすら歩き続けた。

徳沢まで残り半分を切つたあたりだつたらうか、急に雨が降り始めた。始めはそこまで本降りではなかつたので、もう樹林帯に入つていたこともありレインウェアは着なかつたが、やがて土砂降りになつてしまつた。今さらレインウェアを着ても無駄だつたのでそのまま歩いたが、体力的にも精神的にもストレスであつた。びしょ濡れになつて徳沢ロツヂに辿り着いた時には、みんな元気がなかつた。

徳沢ロツヂの軒下で、今後の行動についてみんなで話し合つた。徳沢から上高地までコースタイムでは2時間となつており、1日の行動時間が10時間を超える長丁場となる。しかし、ここからの道はただの林道であり、アップダウンもなかつた。今日徳沢にとどまつても、雨でテントの外に出ることもできない。今日中に上高地まで行つてしまつた方が、明日のんびりと過ごすことができるところが、最初は安藤や大矢が難色を示していたが、結局上高地に向けてもうひと頑張りすることにした（2人とも翌日には進んでおいて良かつたと言つていたので、結果として

この判断は正しかつたと思う）。

上高地へと向かう道はとても美しかつた。鮮やかな緑の森と梓川を見ているととても癒された。しかし、確実に疲労は溜まつていた。足は思ったより大丈夫だつたが、荷物のせいで肩が凝ついていた。夕飯のカレーライスを楽しみにしながら、どうでもいい話をしながらひたすら歩いた。ようやく小梨平キャンプ場に着いたときは、大きな達成感を覚えた。テント場で荷物を降ろすと、疲れから驚くほど設営のやる気が起きなかつた。また雨水が降つてくると面倒なので「みんな早くテントを張ろう」と自分を奮い立たせるために呼び掛けた。このキャンプ場は炊事場と水洗トイレが整備されており、水は有料でトイレは汲み取り式だつた山の中と比べると生活の質が大きく向上した。尋常ではないほどの腹の減り方だつたので、夕食のカレーライスが物凄く美味しかつた。自衛隊の方から頂いたハンバーグは仲良く切り分けで食べた。夕食が終わると、トイレに行つた山本からなぜかランの着信があつた。見てみると、紙を持つていき忘れたので届けてほしいとのことだつた。これにはみんなで大爆笑した。届けに行くと、扉に大きく紙はないという趣旨の張り紙が貼つてあつたのでさらに面白かつた。

4日目 8月19日 晴れ

起きてテントの外に出ると、晴れていて気温も丁度よかつた。昨日頑張ったおかげで、今日は温泉に入つて帰るだけだつた。朝食を取つて撤収を終えた後、ひとまずバスのチケットを買いにバスセンターへと向かつた。河童橋付近から、これまで一度も見ることができていなかつた穗高連峰を見ることができた。梓川の清流と深い緑の森、穂高岳を望むその景色を見ていると、天国つてこんな場所なのではないかと思つた。

立ち寄り入浴を行つてゐるホテルで温泉に入つた。そこで偶然ＩＣＵのワングルの方々に会つた。話を聞くと、黒部五郎岳の方から1週間ほどかけて上高地まで抜けてきたとのことだつた。その後、山本などどうちもぜひ1週間ほどの山行をやつてみたいと話していた。

温泉に入つてお土産などを買つた後バスに乗り込んで松本駅を目指した。松本駅では体調不良のため同行して頂けなかつたＯＢの佐藤さんに昼食をご馳走して頂いた。昼食を頂いた洋食屋どんぐりは、昔から一橋山岳部が北アルプスから下山すると立ち寄つていた店のようだ。久しぶりに食べた肉、久しぶりに飲んだビールが驚くほど美味しかつた。

店を出て駅まで歩くと、朝までいた上高地

とは比べ物にならない暑さであつた。行きは出発時間を早めるためにやむなく特急を使つたが、帰りはお金がないのでいつものように鉄道に乗つた。八王子駅に着くと帰宅ラッシュが始まつていて、急に現実に引き戻された気がした。

#### まとめ

部として、そして僕自身が自ら計画する宿泊山行を始めてから丸1年が経過した。計画したコースを踏破できず、パスタを茹でるのに失敗していた去年の雲取山合宿と比べると、回数を重ねることに山行のレベルは様々に上がつてゐると思う。

計画の立て方は、余裕のある行程にすることで確実に成功させることのできる山行に近づけることができてゐる。今回から予備日も設けたので、万が一停滞することになつてもある程度柔軟に対応できるようになつた。ただ、(悪いことではないかもしれないが)今回は思ったよりもあつけなく、1日分余つた状態で全行程が終わつた。余裕を持たせることと内容を充実させることのバランスングが難しいと感じた。これは今後、個人としても部としても経験を重ねていく中でより的確なプランニングを目指していきたい。

生活技術に関しては、山本など山岳部出身

の経験者のアドバイスが非常に効果的であった。先輩からの技術の伝承が少ない分、後輩の経験者が部員に技術を共有することはとても重要なことであると改めて感じた。

今年はスケジュールの関係等で実現しなかつたが、来年の夏合宿ではぜひ1週間程度の長期山行に挑戦してみたい。そして、このような長期の合宿に参加でくる部員が増えるよう、部全体のレベルを上げていきたい。

## 2016年山岳部山行の記録

時 期	コ ー ス	メ ン バ ー
2016年1/9	生藤山・笛尾根	大矢(CL)・坂本(SL)・黄・清野・曲・高
2/12	雲取山	太田(CL)・内海(SL)
2/19	雲竜渓谷	太田(CL)・上(SL)・内海・大矢
2/26	塔ノ岳・丹沢山	内海(CL)・大矢(SL)・坂本
3/20~23	宮之浦岳	内海(CL)・曲(SL)・高・胡・安藤・坂本・小久保・清野
4/24	高尾山・城山(新歓山行)	内海(CL)・大矢(SL)・曲・有田・清野・原島・小久保・安藤・坂本・工藤・胡・山本・田中・吉田・鈴木
4/30	丹沢山・蛭ヶ岳	内海(CL)・坂本遼(SL)・羽二生
5/1	御坂山地	大矢 OB:藤原・中村
5/7	川苔山(新歓山行)	内海(CL)・坂本(SL)・鈴木・胡・原島・水洞・松橋・山本
5/14~15	黃山	西山
5/15	甲州高尾山(新歓山行)	内海(CL)・安藤(SL)・清野・原島・安藤(SL)・高謙・田中・岩崎
5/21	棒ノ折山・岩葺石山	内海(CL)・水洞(SL)・羽二生・鈴木・松橋・吉田
5/21	乾徳山・黒金山	坂本・曲 OB:藤原・中村
5/28~29	八ヶ岳	内海(CL)・大矢(SL)・曲・原島・坂本・小久保・田中・岩崎
6/11~12	雲取山	小久保(CL)・原島(SL)・水洞・松橋・山本・鈴木・吉田
6/19	日の出山	内海(CL)・上(SL)
6/26	倉岳山・高畑山	大矢(CL)・羽二生(SL)・吉田・松澤
6/24~6/26	剣岳周辺(安全登山普及指導者中央研修会)	内海
7/3	伊豆ヶ岳	坂本(CL)・安藤(SL)・内海・山本
8/5~8	甲斐駒ヶ岳 仙丈ヶ岳	上(CL)・内海(SL)・有田・原島・工藤・坂本・岩崎・吉田・松橋・田中
8/16~19	燕岳～蝶ヶ岳	内海(CL)・坂本(SL)・原島・小久保・安藤・山本・大矢
9/27~28	鳳凰三山	内海(CL)・岩崎・鈴木・松澤・松橋・吉田

■2016年6月20日■

【出席者】佐藤、竹中、本間、小島、佐藤(久)、岡田、中村(雅)、宮武、藤本、高崎(記録)

▽此の所やもすると三月会の参加メンバーも固定化の傾向が見られて心配でしたが、今日は久しぶりに期待の「新人」が顔を出してくれました。

51年卒の藤本さんです。最近、中国は上海から帰任・帰国され、それ以前は米国のシリコン・バレーに駐在されていて、長いこと日本を留守にされていました。仕事も超繁忙期は過ぎた様子で、これからが期待されます。テーブルの端の方にこじんまりと座つていた煙突組の勢力がじわり増強されそうです。

▽今夏の北海道遠征は小屋泊まりではあるものの、幌尻山荘は素泊まりになるので多少の寝具とそれなりの食料・調理道具が必要になります。最近の携帯用食料品は昔に比べて大変良くなっています。アルファーアー米と乾燥野菜が真っ先に頭に浮かぶ方々には隔世の感があるでしょう。朝、出がけにお湯を差しておけば昼飯時には三角形の美味しいオムスビになるというパッケージまであります。実地での経験を余り積んでいないので、本当に食べられるモノが出来るか、明

三月会通信

日・明後日と丹沢は塔ノ岳に担ぎ上げて実践訓練をする計画だそうです。またこれとは別に、シュラフとアルコールのどちらを選択するか悩ましい問題もあるそうです。

▽パソコンが動かなくなつて大変な苦労を強いられている方が多いようです。知らない内にマイクロソフトのウインドウズ 10へのアップグレードが始まつて、途中で止まつてフリーズしてしまい、何をやつても動かない。中には、元に戻すのに、

新品のパソコンを買う金額の半分くらいの費用がかかつた、と言う例もありました。「マイクロソフトの横暴な態度は許し難い!」と言う声が大勢でした。このアップグレードを考えていらつしゃる方は是非慎重に!

▽佐藤さんがまたまた山登り用の新兵器を紹介されました。日経新聞の土曜日の夕刊に連載されている三浦豪太氏のコラム「探検学校 宮之浦岳、記録も楽しむ」に「セイコーから新発売されたプロスペック・アルピニスト S830」という新しい時計が宣伝されています。山歩きを始める前にある種の設定をすると、アップダウンの累積が記憶されて、「今日は標高 × × × M登高した」数值が表示されるそうです。また、応用編では、Bluetooth で繋げば、スマホでも見ることが出来るようです。ただし、今夜の参加メンバーの中では、Bluetooth を使える・理解している人は多く限られていました。

▽標高 3,000M を越えるビーグに立ちたい、今

まで登つていなルートを辿りたい、と言われる佐藤さんの希望ルートは、岳沢から前穂高に登る「重太郎新道」です。今日参加されたメンバーの中で、重太郎新道に対する評価は大きく割れました。樹林帯がかなり上まであるから楽に登れる、反対に、長い梯子だと鎖場・岩場が続いて怖いルートだった、等々。岳沢小屋に泊まれば日帰りで登れる帰路は徳本峠小屋に泊まつて霞沢岳を往復した後に、岩魚留から島々へ、と言う計画だそうです。我と思わん方の同行を募っています。

また、地方の山で懇親山行を催すはどうか、例え京都の北山・残雪期の伯耆大山など、と言う提案もありました。

▽今年も5月下旬に芦安・夜叉神峠周辺の登山道整備を実施しました。芦安ファンクラブの会員で、冬の一ノ倉滝沢・第3スラブをビデオ・カメラを回しながら登攀したと言う女性(父上は一橋ボート部OBだそうです)のボンカ姿に見惚れ・呆れる、という出来事もありましたが、順調に予定していた補修・整備を実施しました。今回で、中池から桧尾峠間と、中池からカシバ平間の登山道改修整備が出来上がり、当初考えていた「周回路」の整備が一段落したことになります。針葉樹会からは9名の会員が参加しました。今後は、このルートをいかに多くのハイカー・登山者に踏んでもらうか、が課題になります。一つの案として、ネット上の「ヤマレコ」等にどんどん投稿しよう、があります。「カンバ平からの白根三山の眺望は

他では得られない、甲斐駒・鳳凰三山も一望出来る。夜叉神峠からの眺めより格段に素晴らしい!」と言うような書き込みを沢山投稿しようとします。また、漸く我々の登山道整備活動が地元でも認識されるようになり、芦安村活性化の一助になることが期待されます。

### ●山行報告

竹中

5／18 網代城山→霞留（ひょうどめ） 山多摩百山取材山行（標高300M前後の里山ハイキングコース）

5／22～23 富田新道→雲取山→三条の湯→お祭多摩百山取材山行、前後に長い林道歩き、緑が美しい。

5／28～29 上高地（第4次登山教室） 山研泊まり初日は明神池周囲、2日目は岳沢往復

6／9～10 メトロ会世話人会（日光光徳小屋泊）2日目に光徳から湯元へハイキング

本間

5／20 ミツバ岳→権現山→細川橋ミツバ岳のブナ林は見事

6／10 御岳山→大岳山→御前山  
三四郎会山行、長かつた。

小島

6／9～10 三四郎会

6／9 宿坊

6／10 御岳宿坊→大岳山→御前山

佐藤（久）

■2016年7月19日 ■

6／9～10 三四郎会  
御岳山→大岳山→馬頭刈尾根→ツヅラ岩  
↓千束

高崎  
6／9～10 三四郎会  
鳩ノ巣→大檜峰→御岳宿坊 単独  
6／10 宿坊→日の出山→日向和田

中村（雅）さんと一緒  
岡田  
5／20 ミツバ岳（丹沢）  
5／28～29 芦安登山道補修  
6／9～10 ツルツル温泉→日の出山→御岳山→  
大岳山→ツヅラ岩→千束

中村（雅）  
5／21 乾徳山→黒金山→西沢渓谷  
藤原さん、学生（曲、大矢）と4人  
ロングコース＆ハイスピード山行  
5／28～29 芦安登山道整備  
6／9 10 三四郎会  
6／9 宿坊（ケーブルで）  
6／9 10 三四郎会  
6／13～17 九重連山  
家内、家内妹さんと3人。  
平治岳 北大船山、大船山、白口岳、中岳のミヤ  
マキリシマを楽しむ。

【出席者】本間、小島、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、  
宮武、高崎（記録）、（学生）・西山、上、辰川

▽北海道遠征から帰ったメンバーから概略の報告  
がありました。特に神威岳の登頂の苦しい登り  
だったようです。麓からほぼ直線的に頂上まで続  
く急傾斜の登山道で、休憩も全員一緒に座れるよ  
うな平らな場所はなく、それぞれのメンバーが登  
山ルートを避けた適当な場所に腰を下ろすだけ、  
のような状況だったとのことです。登りも下り  
も、登山道の両側に茂る熊笹をホールドにするよ  
うな傾斜でした。約12時間の行動で、皆さん疲  
労困憊だったのですが、落伍者はなかったよう  
です。また、大塚武先輩のレリーフにお参りする  
ことが出来ました。遭難は、ちょうど、33年前  
のことだったことがわかりました。食料は、事前  
の準備が奏功し評判は良かったようです。特に、  
昼の弁当として採用したオムスピーバックは予想  
外の好評を得たようです。具材は3種類から選べ  
る、海苔を持参すればもっと良い、など。後ほど  
詳しい報告が書かれることと思います。

▽最近のスマホのアプリには、撮影したい（高山）  
植物にレンズを向けると、その花の名前を教えて  
くれるソフトがあるとの話です。有料か無料かは  
不明ですが、高山植物に興味のある方には朗報か  
も知れません。鳥の鳴き声にマイクを向ければ鳥  
本間  
7／2 三ノ塔、蓑毛→塔ノ台→三ノ塔→大倉  
トレーニング① 聖・赤石へのトレーニング山  
行。二ノ塔の登りで脚が撃り、三ノ塔尾根を下る。  
7／5 塔ノ岳、大倉尾根→塔ノ岳→表尾根→菩提  
原  
トレーニング② ヤビツ峰からの最終バスに間に  
合わず、手前の菩提峰から下る。

7／8～10 北海道シリーズB班 蛭川夫妻と  
9日 駒ヶ岳（馬の背まで）

の名前を教えてくれるソフトは無いでしょうか。

▽夏休みの、南アルプスの南部を縦走する計画がま  
とまってきました。本間さん、小島さん、中村（雅）  
さん、の3人で、7月31日から8月4日まで、  
榎島から聖岳、赤石岳を経て、小島さん、中村（雅）

さんは広河原経由で小渋川を下り、本間さんは赤  
石小屋経由で榎島に下る計画です。広河原小屋に  
向かうかは、小渋川は渡渉があるので最終的には

天候を見て決めよう、という話です。昨年夏の経  
験を踏まえ、先ず聖光小屋に宿泊して光岳から北  
上する縦走を計画したのですが、聖光小屋が休業  
中と言う情報があり、急遽、縦走コースを変更さ  
れたそうです。成功を祈ります。

▽この後、学生さんを交えて、体育会山岳部のあり  
方、合宿計画、部会の頻度、トレーニング等々に  
ついて話し合いが持たれました。

### ●山行報告

10日 当別丸山

7／17 鍋割山→雨山三山 トレーニング③

(二股→鍋割→雨山三山→山神峠→玄倉

岡田さん、T氏(昼から会)

小島

7／4～7／10 峴尻岳、神威岳

佐藤(久)さん達と一緒に

佐藤(久)

7／4～7／10 同上

北海道シリーズのフィナーレを飾るにふさわしい山行でした。神威岳は沢歩きもあり、急登の腕力登りありで疲れたけれど、楽しい山登りでした。

岡田

7／4～7／10 同上

7／17 鍋割山→雨山三山→山神峠→玄倉

同行者…本間さん、高橋さん(昼から会)

雨山を過ぎ、檜岳(ヒノキダツカ)から山神峠へ下るルートは、人は殆ど歩いていない。山神峠から玄倉(露平橋経由あとは林道を約50分)へのルートは崩落の為分からなくなつており、「通行禁止」が適当。

中村(雅)

7／4～7／10 峴尻岳、神威岳

宮武

7／4～7／10 同上

小島、久、岡田、宮武に現地の手塚さん、小野さんは札幌で合流。

（注）8月、9月の三月会は休止でした。

■2016年10月17日■

【出席者】竹中、本間、小島、佐藤(久)、岡田、井草、宮武、前神、兵藤、(学生)上(4年)、内海

(3年)、高崎(記録)

▽台風に邪魔をされて、8月・9月と最近は2度も中止になってしましました。今回は、学生さんの参加もあって大人数になりました。

▽キリマンジャロから帰られた久さん、岡田さん、から道中の報告がありました。今まで5,000Mはヒマラヤのトレッキングで何度も経験されているはずの久さん、岡田さんが「高山病にやられたようだ」という話でした。お二人に寄れば「多分、高山病対策でダイヤモンドスを沢山飲んだ副作用かも知れない」ということでした、中村さんは、キリマンジャロの最高峰にあたるウフル・

ピークに到達されたものの、他の二人はギルマンズ・ポイントまで諦めた、という話でした。下り道、目が霞んでしまい、両脇を救援隊の届強な若者に抱きかかえられて降りた、という話もありました。数年前に同じキリマンジャロを登られたパートナーも同様のことと言わっていましたが、登頂する前の晩に良く眠つたかどうか、がポイントになる、という話もあります。良く眠らな

い方が良いとか。また、この日には別の山岳遭難事故の話があり、マナスルに登頂された東京農業大学隊のお一人が滑落された、という話もありました。ご冥福を祈ります。

▽キリマンジャロとかヒマラヤ・トレッキングにかけられたみなさんの感想として「欧米人は強いなー」と言う印象をお持ちの方が多いようです。そんなに欧米人だけが強いのかと言う疑問があります。多分、欧米からの登山者は我々日本人よりも若いに違いない、年寄りに見えるだけで、本当は若いのだ、がこの場での結論でした。

▽現役学生さん達の活動に財政的な援助をする為に「公益財団法人一橋大学後援会」を使い道を「一橋山岳部」に指定して寄付をする、税金の免除も受けられるし、という提案がありました。ただし、この場合は、今、学生山岳部が何に困っているのか判らず、針葉樹会からの潤沢な補助金を十分に使えていない現状では無理がありそう。針葉樹会を通した方が実効的である、という結論になりました。

▽この日は、学生山岳部から上さん(4年)、内海さん(3年)の参加がありました。人数的には、他の山岳部が羨むような陣容ですが、内実はどん風になつてゐるのか心配があります。下手をすれば「命」に関わるような活動をしている訳ですから。小島さんの呼びかけで、合宿とか「部」としての活動状況とかを聞いて、必要あれば指導もせねば、という動機がありました。今後、定期的

に学生との話し合いを持とう、という話になりました。第1歩として、「部の規約」を検討してもうことになりました。また、「合宿」の位置づけ、個人山行のメンバー構成、トレーニングなども今後継続して検討してもらうことになりました。「此の指とまれ」式の山行も良いが、部としてのまとまりのある山行も考えていくべきでしょう。此の後、いろいろの意見が出されました。

「山岳部」も少しずつ育ちつつあります。

▽このところ「針葉樹会名簿」に関する問い合わせがあります。総務担当幹事の高崎（昭和41年卒）に連絡頂ければお送りできます。メール・アドレスは s.takasaki@nifty.com です。宜しくお願ひします。

### ● 山行報告

竹中

8／13 奥多摩高水三山（高水、岩茸石）

「山の日」関連行事（奥多摩B.C.）参加の前に一山、（単独）

8／20 蓼科・八ヶ峰

登山教室5期生サポート。

9／1～4 岳沢（前穂往復）、中畠新道入口、徳本峠～島々

山の家

### ■ 訃報

名和 泰三氏（昭和39年卒、特別会員）

2016年11月7日（逝去）謹んでご冥福

をお祈り申し上げます

10／1 奥多摩・鷹ノ巣山

8／4 百間洞山の家～赤石岳～赤石小屋  
8／5 赤石小屋～横島～静岡  
9／21～30 キリシマジャロ登山・サファリ

10／15 棒ノ折山

登山教室5期生サポート

佐藤（久）さん、岡田さんと3人

登山教室4期生サポート

10／15 棒ノ折山

登山教室5期生サポート

7／31～8／5 聖岳～赤石岳

小島 中村さん、本間さんと一緒に。

佐藤（久） 佐藤（久）

8／7～9 月山

8／7～9 羽黒山

8／7～9 姥沢～姥ヶ岳～月山～八合目

9／21～30 キリマンジャロ

9／22～27 キリマンジャロ登山

9／26 ウフル・ピーク（5895m）登頂

9／28 タランギーレ・サファリ

井草 9～10月 奥多摩・広沢山、棒ノ折山、他

兵藤 10／7～9 北沢峠

駒・千丈に行く予定ながら、雨でテントで飲んで終わった。

（佐藤（周）、神野）

兵藤 9～10月 奥多摩・広沢山、棒ノ折山、他

9／26 ウフル・ピーク（5895m）登頂

9／28 タランギーレ・サファリ

井草 9～10月 奥多摩・広沢山、棒ノ折山、他

兵藤 9～10月 奥多摩・広沢山、棒ノ折山、他

9／26 ウフル・ピーク（5895m）登頂

9／28 タランギーレ・サファリ

井草 9～10月 奥多摩・広沢山、棒ノ折山、他

▼ このほど針葉樹会報の編集をすることとなりました。私は、昭和42年卒業で現在73歳です（かなりの高齢であります）。実は、1971年6月発行の針葉樹会報復刊29号から1974年5月発行の同復刊39号までの編集係をやつております、出戻りであります。

さて、今号から、井草編集委員の発案による『私の一葉』を連載で始めることにいたしました。高橋尚好さん（昭和29年卒）が第一号を引き受けくださいましたが、原稿集めの段階で南昌宏さん（昭和28年卒）からご丁寧な書状をいただきました。ご本人のご了承は得ておりませんが、会員の方々に紹介させていただきま

す。  
——『私の一葉』寄稿を丁重にお断りされたあと）『なお、私にとってもっとも貴重な「思い出の一葉は、すでに『針葉樹会報』第113号（2008年12月発行）『旧制最後の山岳部時代』に提供し、故中村正司兄が私の思いもこめて投稿文を結び掲載されたことを思い出します。——

みなさまからの投稿原稿が、編集係の手元に山積している状況を夢見て……。（岡田）  
▼ 小島さんから岡田さんへ編集幹事（編集長）が交代したのを機に私も今年度で編集幹事を退任させていただこうと思います。変な話ですが、以前よりも時間的な余裕がなくなってしまった。山仕事とわざび栽培・野良仕事で、天気が悪い日のほかはテレビ、パソコンとも縁

のない奥多摩暮らしが常態になっています。この暮れも、たくわんや白菜の漬け込み、わさびの収穫、わさび漬け作り、米一俵分の餅つきの準備やらで大忙しの毎日です。（井草）

▼ 2016年11月、沖縄・やんばるの森を3時間ほど歩きました。夏はハブが活発なので、森歩きは11月以降がよいことです。先頭の方が笹を手折り、道に対して直角に1秒間に2往復ぐらいの速さで、几帳面に道を掃き清めるよう、「露払い」をしながら進んでくださるので安心でした。また倒木の上を体長20cmほどのリュウキュウヤマガメが、首をもたげながらトコッ…と歩いていました。赤ちゃんのにぎりこぶしぐらいの大きさの、翡翠色をしたせつけるののような質感のなめくじ（？）が目の前の木にくっついているのも教えてもらいました。未知の出会いに何度も小さく声を上げました。

木々は高く、森の中は地底のようでした。その「穴巣」は、ほどよい湿度と温度に保たれた、特別な空気の層で満たされていました。それが独特な生態系を生むのでしょう。16年9月に「やんばる国立公園」に指定された地域と隣接して米軍の北部訓練場があり、そこにオスプレイのヘリパッド（着陸帯）が建設されようとしています。私もオスプレイが頭上で飛ぶとどうなるかを体感しました。「これが低周波の影響か」と思わせる、体の骨が揺れて酔うような気分に襲われました。

（川名）

## ■会費納入のお願い

平成28年度（28年6月～29年5月）の会費納入をお願いいたします。

会費（普通会費）は卒業年次に関係なく、一律5000円です。（ただし、昭和29年度以前卒業の会員は従来通り会費免除となります）。

また、普通会費のほかに、期間を問わず賛助会費を募集しております。賛助会費は一口1000円で、口数は任意です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳部への支援強化の必要性が高まっていますので、その資金手当てのためにも、賛助会費へのご協力をお願い申し上げます。

### ◎会費納入先 ◎

三菱東京UFJ銀行 赤坂支店  
口座名 針葉樹会  
口座番号 普通4825647

\*振込の際、適用欄にお名前と卒年次をご記入してください。

会計幹事 佐藤久尚